

貝文雜記

五之上

73
6592
9



門 3
號 6592
卷 3

伊勢平藏貞丈先生著述

貞丈雜記 第二帙

東都書林文溪堂發行

貞丈雜記卷之五

裝束之部目錄

- 一 素襖之事 廿ヶ条 圖
- 一 肩衣之事 四ヶ条
- 一 上下之事 四ヶ条
- 一 大口之事 圖
- 一 指貫之事 圖
- 一 葛袴之事
- 一 盤領方領之事 圖
- 一 狩襖之事 二ヶ条
- 一 半袴之事
- 一 直垂之事 廿二ヶ条 圖
- 一 狩衣之事 圖 兼布衣之事
- 一 小袴之事
- 一 水干之事 五ヶ条 圖
- 一 長絹之事 二ヶ条 圖

雜記五

目一

昭和十九年四月五日
寄贈
三上廉

- 一 十德之事 三ヶ条 圖
- 一 脛中之事 圖
- 一 草袴草衣之事
- 一 束帶之事
- 一 褂之事
- 一 出衣之事
- 一 腰紐之事
- 一 端袖之事
- 一 山伏裝束之事 二ヶ条 圖
- 一 狩裝束之事

- 一 四幅袴之事 圖
- 一 行膝之事 六ヶ条 圖
- 一 女房衆裝束之事 圖
- 一 衣冠之事
- 一 衣之事
- 一 袖之事
- 一 下袴之事
- 一 總着之事
- 一 腰當之事
- 一 袖細之事

- 一 傍續之事
- 一 御幘之事 圖
- 一 御引直衣之事
- 一 紅梅二品有之事
- 一 穀織之事 圖
- 一 浮線綾之事 圖
- 一 白襖之事
- 一 縋線綾之事
- 一 練色之事
- 一 牡丹色之事

- 一 裘代之事 三ヶ条 圖
- 一 金巾子御冠之事 圖
- 一 小口之御袴之事
- 一 綾之文小葵之事
- 一 固文浮文之事
- 一 二重織物之事
- 一 縮線綾之事
- 一 魚綾之事
- 一 練之蔭物之事
- 一 葡萄蔭之事

- 一 麴塵之事
- 一 朽葉之事
- 一 平絹緇二重之事
- 一 宮形之事 圖
- 一 片色之事
- 一 折帛板引之事
- 一 瑩之事
- 一 紋丸之内画事
- 一 一ッ襟之事
- 一 淨衣之事

- 一 海松色之事
- 一 羅之織目之圖
- 一 夏冬生糸練糸之事
- 一 一介染之事
- 一 綾文之事
- 一 引倍支之事
- 一 衣紋之始之事
- 一 搔練之事
- 一 當色之事
- 一 褐衣之事

- 一 小袍之事
- 一 入紐之事
- 一 練貫之事
- 一 直綴之事
- 一 鼻高沓之事
- 一 袖括之事
- 一 子持筋之事
- 一 凡裝束着様之事

- 一 指子之事
- 一 細長之事
- 一 武家內衣之事
- 一 淺沓之事 圖
- 一 深沓之事
- 一 夜具之直垂之事
- 一 火車裝束之事

以上

貞丈雜記卷之五

裝束類之部

伊勢貞友
千賀春城
岡田光大
門人
校同

一素襖スエの事襖スエ之字ハ玉篇ハと云書ハ袍襖ハウエと注シ一ハ袍ハウも襖スエ
毛一敷ハありゆハ玉篇ハに袍襖ハウエと注シて云ヒる也袍襖ハウエハ上ウ
み著ル裝束シヤクを見禮服レイフク也此禮服レイフクハ官位クニイある人ハ綾アヤありを
以テ縫ヌふ也每位ツ毎官ツの者ハ麻布アサを以テ縫ヌふゆハ素襖スエと
云也素スといハうハぎハるハもハあリ鹿相カサありを云也一
襖字の音ハアフ也
アフの音轉ハ

雜記五

素袍ト云名目ノ
古書ニ見エシハ寛
仁應仁文明ノ
比ノ書ニ見ユ上下
ト云名目ハ應永
ノ比ヨリ見ユ其
以前ノ書ニ素袍
上下ト云テ見ユ
ズ地夏ハ越後布

又モジサイニミテ
単也冬ハ麻又ハ
布ヲ用是又單也

アラト云みて和凱の 公家の朝服ハ朝服トハ朝廷ト出仕
禁中の袍ト云服有り襖ト云服あり衣服令ト云古書ハ文
官の服を袍ト云 文官トハ學士を奉トシ世を
治メ政事を專ル執行ス也 是ハ縫腋の
衣也 縫腋トハ両方の腋をぬい
て縫フ也 武官の服を襖ト云 武官トハ
天子を守護スル司を云也大将中將
少將左衛門右衛門左兵衛右兵衛の類あり 是ハ關腋
の衣也 關腋トハ両方の腋をぬい
て縫フ也 此襖の事を後代ハ關
腋の袍ト云奉名ハ襖形也

素襖トモ書キ又素袍トモ書ク襖の字をヨシトモ書ク古
書ハ皆襖の字を用ヨリ又ウチヨリ書クヨリ又モトヨリ
あどク書クハ悪クモ何カト書クトモ書クモ何カト

とモ書ク本也あどヒト書クモあをヒトとモ書ク同ノ例也素袍
とモ書クモあをヒトとモ書クモあをヒトとモ書クモあをヒトとモ書ク

とモ書クモあをヒトとモ書クモあをヒトとモ書クモあをヒトとモ書ク
とモ書クモあをヒトとモ書クモあをヒトとモ書クモあをヒトとモ書ク

關草クニカハト云由ナシ金仙寺ハ 伊勢守 眞宗事 黒梅花用ナシ紫草ハ赤

見及ハ丹波目結ノ目結トハかのこを深ク縫フ 疋ヒキきめ草くらき草トモ云ク 常世

疋ヒキきめ草くらき草トモ云ク 常世 疋ヒキきめ草くらき草トモ云ク 常世
疋ヒキきめ草くらき草トモ云ク 常世 疋ヒキきめ草くらき草トモ云ク 常世

相対の紋あざは不付い云々、嵯川記云上下の上下と云 まある心 色あ
 何れもて然い先あきざうちんむくのこけ品能い又うろ歩
 ハ大畧あきざうい入道あざうちんのを著い紋の子
 ハ松弁露飛あを付い又家の紋をも付い小紋の上下ハ
 畧紋小紋の上下と云ハ大畧 近半を付い又徳圃書
 系レコソレ云春の出仕衣裳のろりもあふ袴黄きハ深レ河
 のセウフク賞祝の物を肩ハ付也也則柳ハ一夏の上下の多地
 を水色ハ深松を肩ハ付也也秋の上下の多地を初ハ不
 深相の葉又ハ時の季を紋ハ付也也冬ハの上下ハ黒ハ布
 也又義詮ヨシ公は系内紋式ニ云歩行兵三百人各家紋付

春成相傳同書云
 素襖赤色の事
 浅黄かちん茶味
 梅ハ梅ハ何ハ
 ちハ云ハ

たる杏葉帯劔也云々又殿中日記寛正六年八月廿二日
 細川殿馬場ハおつて犬追物有ハ一ハるを記ハする不ハ貴殿
 伊勢守 貞親ハ復 浅ハあふ地ハうちん越後布ハ紋清ハあハらうぬひめ
 浅ハけハそのとをハるハふ ぬひめつけと云 三寸あまりの筋一ハを
 伊勢兵庫助 貞宗ハ奉 浅ハ馬 月毛 浅ハあふ地ハ白地文
 又武庫 浅ハ馬 貞宗ハ奉 浅ハあふ地ハうちんハ尾長ハる
 又ひがきをハうちんハ若の葉をハこハれハんハハゆえハぎ又
 伊勢備中守 貞藤ハ奉 浅ハ馬 貞宗ハ奉 浅ハあふ地ハうちんハ尾長ハる
 ニハぬひめ付ハる ぬひめつけと云 右素襖直垂の紋家
 切付紋ハのハりハあり 右素襖直垂の紋家
 の紋ハもハ外の紋ハもハ付ハる 澁文ハなり糸ハとハ穿ハ云
 浅ハあふハる浦ハのハこハきぬ袴ハあハどの紋ハの子ハをハ目ハとハぬハがハ可ハ

紙は 是又家の紋見

さのもちりさきも又大あまの人よるぶ

ハウコモノ

房小者八人の目子立は務あまの能はさむらある人ハ

きぐめよたぬぐまゆい

長刀持ノ者ノ事

一 是あふの紋はむやうゆんと云ふる紋の内をささるは

むらうを云ふ月日事始記は云むやうゆんと云ふをり

くくは深さをむやうゆんと云ふ禁制は只二色を以

てつらゆるは然は宗五冊校書は云むやうゆんハ二色を以

らふとるを云ふ又云草木の葉をくふ色どうたるをむやう

ゆん何ゆゆ条くす書は云かすきひやゆんハは禁制は

は是ハ一殿のちれのときせむきき為也又云むやうゆん

紋ニ云

といたとハ三色を深さる事よるハ二色を三色四色は深さる

事ハ不若それハむやうゆんハかきくはく一をるをくは成

次第古実よ云ひやゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

ゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

ゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

ゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

ゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

ゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

ゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆんゆん

不及抄汰ハ 東鑑卷二十ニ評文水干ニ著ニ紅葉菊花

雜記五

五

一 此あふの深縁よりうきと云るは寛正五年四月礼河原

初進能機表の馬は公方様は志あることまきけり

也と云々聞書はかきまじりもんは禁制也一随流

の時意せむべきも也云々云々云々也取の老深也布

をかき書て手の上を糸としかく書ておと深縁後巻

糸をとげ糸の糸は白く外は糸とすも今知立傳り

云敷之一名を老深と云也殿中日記寛正六年三月

四日花見の御成の事を記したるは所様上様各は供

元上下巻深也かきまじり書ハ水也

一 古き素襖と云物あり糸と書と云云云云云と云越後

土佐光茂カ犬
追物ノ繪ニスキ
スアフラ著タル
射手アリ

布を深縁を中は是ハ六月七月各巻ハ八月朔日よりあり

はあふといふ時ときすあふは先の深縁と云入は

年中めはる珠衣由金仙寺伊勢守貞宗筆のこまひい

布といふ今のちと云物あり糸と書と云云の布の糸あふを云

一 糸あふの糸あふと云物ありは供古実と云糸あふの事

殿中ハ糸あふの糸あふの糸あふの糸あふの糸あふ

糸あふハ不苦の糸あふ聞書と云糸あふの糸あふの糸あふ

殿中ハ糸あふの糸あふの糸あふの糸あふの糸あふ

つと糸あふの糸あふの糸あふの糸あふの糸あふ

の糸あふの糸あふの糸あふの糸あふの糸あふ

とり深のり小袖
の部見合へ

一 素襖の深格より深と云夏有真鏡犬追物記云犬射素
襖アヲより深と云五色は細筋ハツスチを押せる志何の深より教
本形より

射子アサをあらふ袖
をあらふもあら
さくもあら大追
物のまより

一 射子アサをあらふと別カサカサのより射子アサあらふ人の目より格は風流は
まあらふのより射子あらふ人の目より格は風流は
深と云也犬追物の時射子あらふと云笠掛の時
ハ笠掛カサカサをあらふと云とてハ射子アサをあらふと云也

一 小素襖と云ハ別のより射子アサ上ハ常のまあらふのめくく袖
一幅半也下ハ長袴カサカサを着る射子アサを短くく
まどとて短の短き袴カサカサを着る射子アサを短くく

一 今イマの古袴也深衣紋カサカサハ上と用格も也笠掛日

記細川澄元云それの時て得る古袴狩衣大帽子素カサカサ射子

袍カサカサ以下二日三日新より射子アサをあらふと云射子

装束むのカサカサをき急何カサカサのカサカサをカサカサとて留カサカサをカサカサとて今ハ小素何カサカサ行

膝カサカサ皆カサカサ射子アサ也云今ハハ永正年中をさく云又云小

まあらふものねより袖カサカサ射子アサのカサカサのカサカサのカサカサの内カサカサの

射子アサのカサカサのカサカサのカサカサのカサカサの内カサカサの

くカサカサ射子アサのカサカサのカサカサのカサカサの内カサカサの

仕之面カサカサ著大口直垂走カサカサ元皆小素袍カサカサより

一 うちつけ素襖と云ハまあらふのまを袴の内カサカサへカサカサ羽織カサカサを

永正六年大館尚氏記也

はあふの七下
同じ回数あるを
うそいふと云上
と下とある故に
遠くをまたあか
むの海と云故に
同一故に上
下を遠くはあ
あふの海と云
まう

着るごとくおろけん志を云せ禮ある事也うちかけ肩
衣キタと云も同一心におろけまあかおかけのたきぬおかけ意
が、狼藉ある由条、マシ書よんてり

一 浴供古実云まあ袴の故をひらりて ひらりてと八同
しねまるといふ
付るといふ 地の色を上下の色をカキ略してめし方もした略
儀まじ自然いさひとあめしはるもゆれ何も略儀まじ
上ハさいぬの毛あか 若おさあき方あどハ揃もくすくす
下ハ毛の毛袴也 此れ互もあるまじくゆえ今つぎ上下と云肩衣と袴
色の遠くチカるを用ひも是より出せるまじく

一 舊記よりみまき又志向 上と下と同一毛甲一故に一對あるをいふ
くま下の町あどくあるハ皆まあ

かの事也今ハ肩衣袴を上下と云 程又くわ
くまに記す

一 是あふ引と云ハ古ハ酒むきの時人ハ盃をさうて揃志る
ま何ふをぬぎて 盃さうとまハ酒のハすをぬひはぬき
云也刀引と云も同一心ハ盃をさうて揃刀をつくす也古ハ
酒宴の時毎度み共何りくす舊記ハ見たり

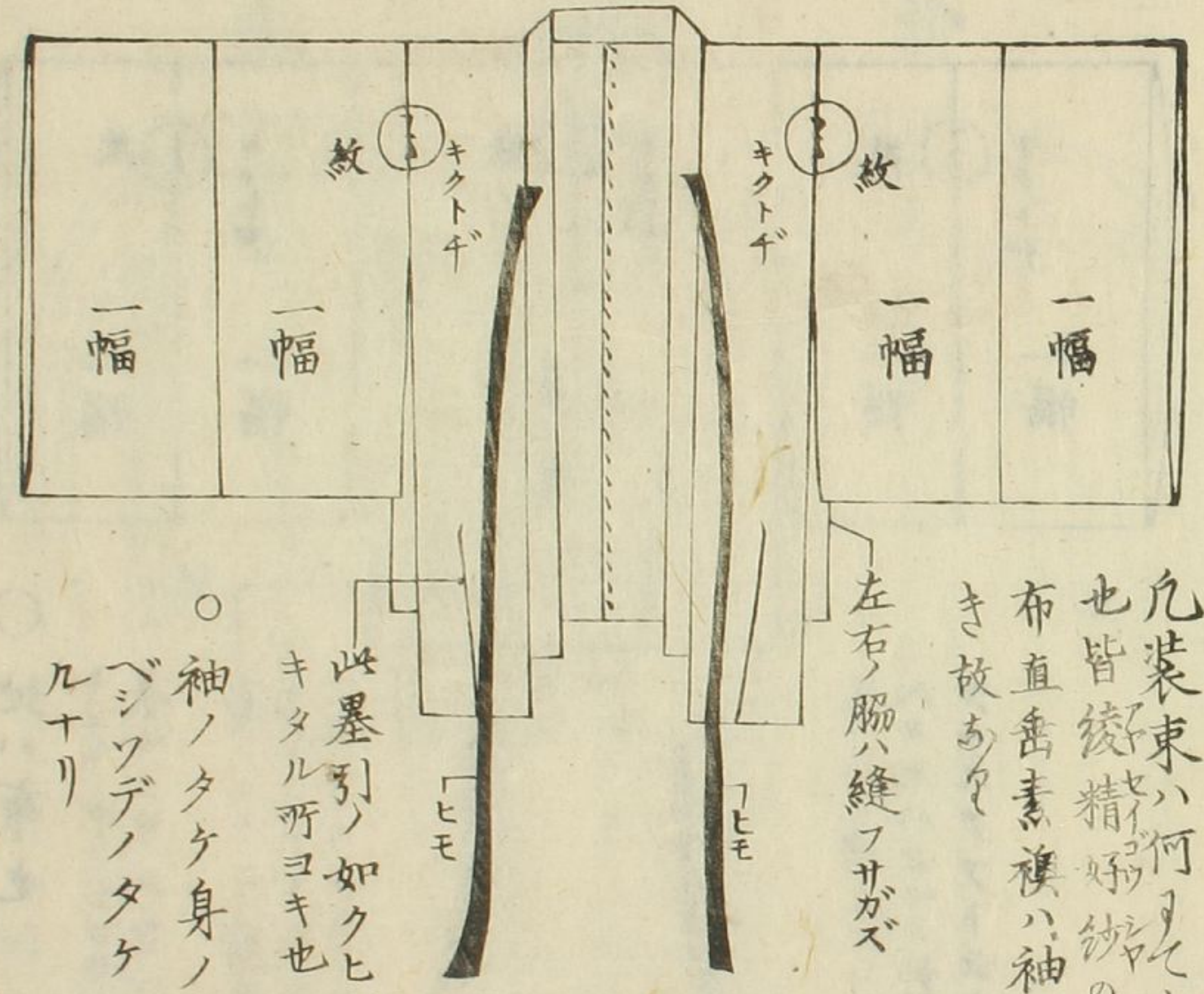
一 是あふぬぎと云ハ サルカク猿樂ハ能をさせくす時ま何ふをぬぎて
猿樂まことすの事ハ翌日猿樂その素襦を脱りる人の
家へ持て廻りてき目をり受る也ま何ふぬぎの時ま何ふ
本ぬぎて袴ハ忌さすくす 吾等ハ別の素襦を脱りる
あ 是も揃高の時の事ハ旧記ハ見たり不揃ぬぎと云も同

心形

一 此の衣は今後とも知らざる物と云はれしは、
又繪圖をあらわしおくべきとて七人の知りし
事をも書記し置く也古の人を以て後とも知らざる
故にしるべきを今世の證據ある事多き也

貞丈云素襖と云肢鎌倉將軍代も其名ゆえず東
濫見えは其より己の衣のちハ猶見えず京都將軍以
の衣は元より古代ハ衣を以て唐人の常服とせり
按る素襖と衣裁縫遠く不あり素襖と衣ハ
衣裁縫の衣裁縫を京都將軍の代より布衣裁縫の衣裁縫

○素襖前



凡装束ハ何れも袖ハ一幅半の物
也皆綾精好紗の類ハ幅廣き故也
布直垂素襖ハ袖二幅あり布ハ幅狭
き故あり

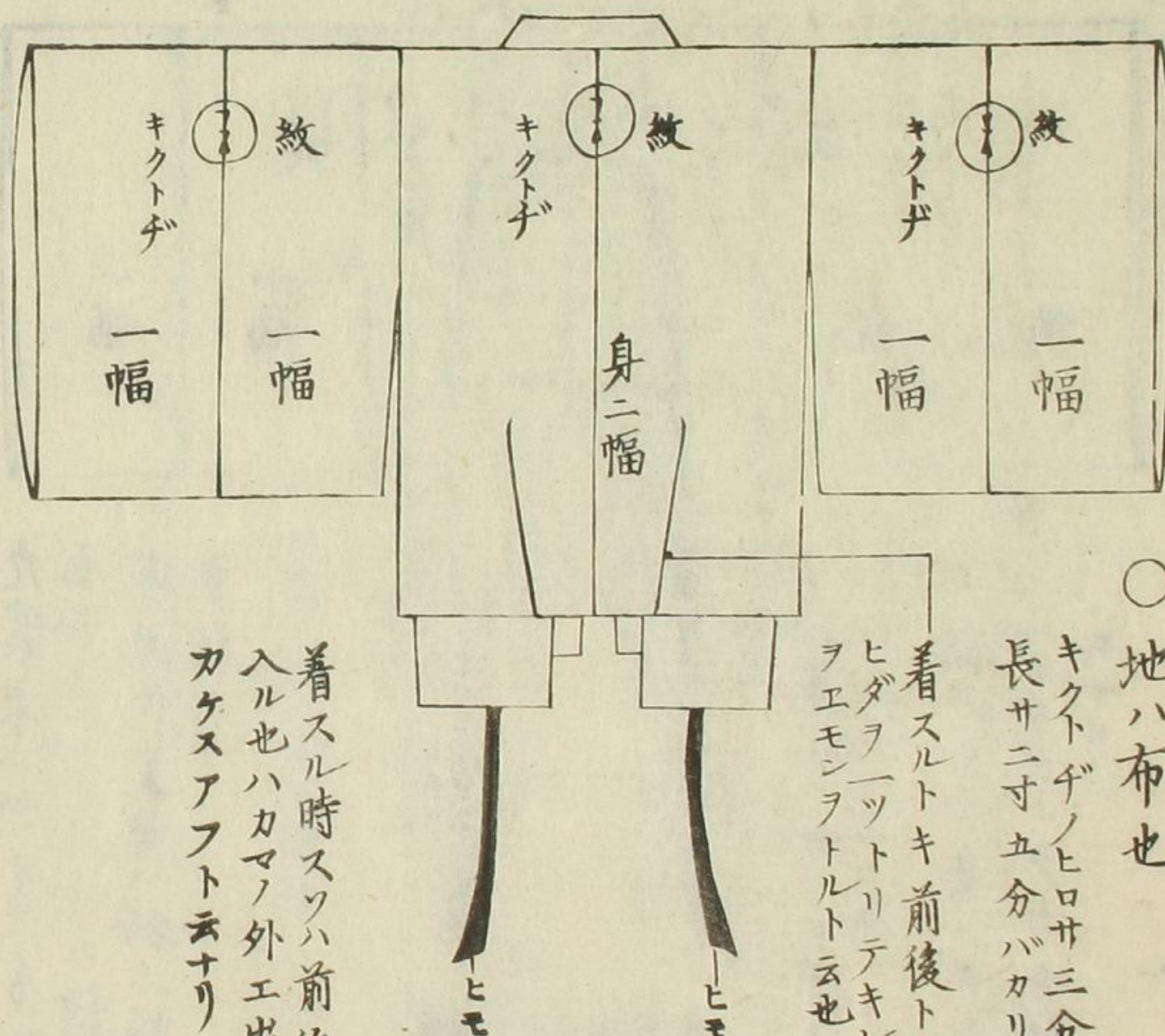
左右脇ハ縫フサガズ

紐ノタケ足ナシ大
テイヒガ逆上ツク
ホドナリ
高倉家説肩ヨ
リ膝口マダノ寸ト
云ヘリ

此墨引ノ如クヒダヲ一ツトリテ着ベシ
キタル所ヨキ也

○ 袖ノタケ身ノタケ人ノ大小ニヨル
ベシソデノタケ小袖ヨリ大ニ長クス
ルナリ

○素襖後



○地ハ布也

キクトガノヒロサ三分余ホド
長サ二寸五分ハカリ

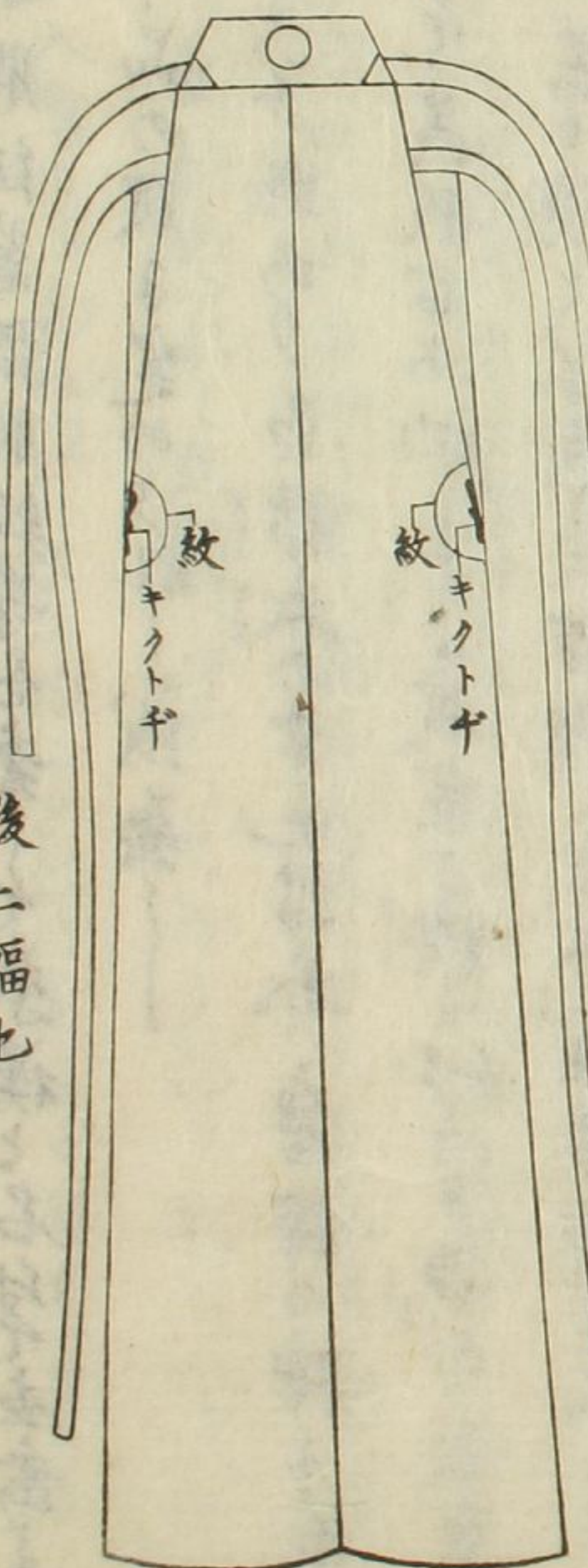
着スルトキ前後トモニ墨引ノゴトク
ヒダヲ一ツトリテキレバ着タル所ヨシ是
ヲエモンヲトルト云也

着スル時スツハ前後共ニ袴ノ内エ
入ル也ハカマノ外エ出シテ着ルヲウチ
カケスアフト云ナリ

○素襖之袴

長袴ナリ
地ハ布也
長サハ足ノツマサキヨリ一尺ホドアマルホド也

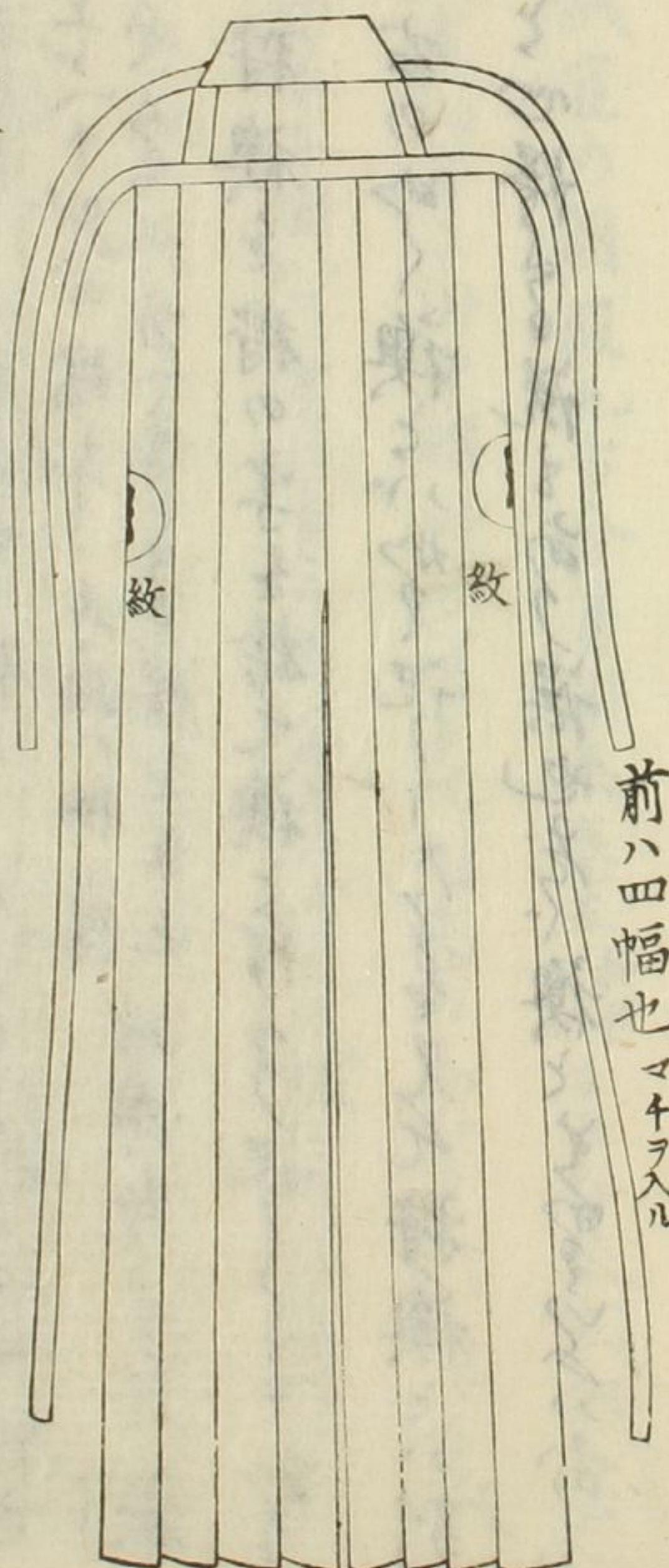
後



雜記五

後二幅也
十

前



前ハ四幅也
マチヲ入ル

正字通ト云字書ニ襖ノ字ノ注ニ裁ノ属ニ書故ニ今以夾衣為襖トアリ夾衣ハアハヤ衣ナリ此義ニヨリテ符衣ニ裏ヲ付タルヲ符襖ト云説アリ此説ワロシ不^用之

○施花菓葉ニ符襖たが襖とも云と記ありハ誤也

○名目抄云符襖隨身等着之舎年飼野用又此華也然而又号符衣ニ是符衣ヲ符襖ト云ノ證文正説也

○續古事談云昔ハ諸道ノ博士ナドハ果束執スル吏ナカリケルニヤ

光榮ト云ル陰陽師上東門院御座ノ時アサマシゲナル上ノキ又指貫ニヒラガツハキテピンモカハデ中門ヨリ入テハシガクシノ間ヨリ登リテフトフロヨリ白虫ヲ取出シテカウランノヒラゲタニアラク大エビシテコロシケリウヘノキヌノシタニハ布ノ襖ト云物ラダキタリケルニ布ノ襖ハ符襖ト云モノ人ノキケルモノナリユヘ布ノ襖トイフモノトハ記シタルナリ右ノ光榮ト云入モ和泉式部モ一條院ノ御代ノ人也

つけ^{コシヒモ}和腰紐菊綴胸紐等を^シ変じて素襖と名付^トて番よ

里も下品の服に定められ成^ル一

一符襖カリアと云物ありカリギヌ即符衣の事也符衣ハ舊符の時ニ若^カ新服して其形右ノ記したる武官の襖アに似る物あり故舊符の時若^カ襖といふ義も符襖とも云此符襖を入すも里風流を好て大^{オホ}衿耳袖を錦ニシキあぐるも何れ大衿ハ上ノ下ガの端あり耳袖ハ袖ニ幅の内をぐる方より幅を云也此錦あぐるも裁久^クなる符襖を符の字を捨て襖とけり記するあり誤あり右の如く襖とバカリ記したるをえん符襖とハ別の物也と心得る説もあり誤也^カ襖とも云里ノハお

云ゆく武官の朝服也古今著聞集卷五和歌之部云和泉式部忍ニヒて稻荷（糸けり）田中明神の禊^スの時志^シけるにいとま^ハ祀と思ひたるも回^ハり世^ハを^ハとつもの^ハ越^ハりてきそ^ハい^ハもふら^ハる^ハ下^ハ向^ハの^ハ程^ハも^ハれ^ハあ^ハる^ハは^ハは^ハ何^ハを^ハく^ハて^ハせ^ハん^ハの^ハさて次日式部もこの越^ハみ^ハび^ハて^ハる^ハを^ハあ^ハる^ハ大^ハや^ハの^ハ童^ハの^ハ女^ハも^ハき^ハも^ハま^ハを^ハま^ハあ^ハれ^ハハ^ハ何^ハを^ハと^ハい^ハを^ハけ^ハぬ^ハや^ハい^ハせ^ハん^ハといひ^ハて^ハさ^ハあ^ハきた^ハる^ハを^ハひろ^ハげ^ハて^ハれ^ハむ^ハ時^ハ雨^ハも^ハい^ハあ^ハる^ハの^ハ山^ハ乃^ハか^ハみ^ハぢ^ハあ^ハを^ハあ^ハら^ハし^ハ思^ハひ^ハあ^ハて^ハき^ハと^ハ著^ハる^ハも^ハり^ハ式^ハ部^ハあ^ハれ^ハと思^ハひ^ハて^ハけ^ハり^ハを^ハよ^ハび^ハて^ハわ^ハく^ハとい^ハひ^ハて^ハよ^ハい^ハ入^ハせ^ハら^ハあ^ハん^ハ云^ハく^ハ太^ハの^ハ回^ハる^ハ志^ハの^ハ着^ハる^ハあ^ハを^ハハ^ハ布^ハの

風呂記云むちを
ハ公方様も指
は也近代ハ法
住院被褥者雄
成又鞍馬の時
成の時肩衣の袴
右ハ公方様肩衣
袴ハ云ハ云ハ右
よげ

小笠原兵庫助長考
記三首実檢法武ヲ
記シテ母衣ニテモウキ
カケニモ又肩衣ニモ其
死體着ル物ヲ包テ
出スアリ方長考ハ
義満公ノ代ノ人ニ録
倉年中行事ヨリモ
ハルカ昔ノ書ナリ
○巖川記ニ肩衣袴同
色ニ候トモモソノ袴ハ
ヲモテ向ハ出候ハスハ
内ニテハ着候云々
モソノトハ才綿也
○同記カタ衣ニ裏ヲツ
ケテ着候ト表向ハ
着マシク云々
○貞順約文書ニ云ウラ
ノ付タルカタ衣ノコラ
ウセキナルト云々

布の狩襖ある前記を初の大らびも袖を錦綾あぶら

一襖の袴と古書あるハ狩襖の袴を云也きふけち指貫の

袴也狩襖着る時ハ必指貫着る故指貫を襖の袴と云之

古今著聞集卷六管弦之部花田のひと元り衣ハあをらうほきこ

引入烏帽子一男おくれごとせきこるあり云是ハ六

うりきぬをきて襖袴きたるを云也狩袴襖袴同物也
装束拾要抄ニ見タリ

一肩衣のる松永彈正少弼久秀とあふの袖を云捨りきぬ

と云物を始る由中侍ハあやまり也肩衣ハ松永より

りの考あり也謙倉年中行事ニ鎌倉殿出陣の出立を

記シテ金襴の肩衣ハ小袴をぬき見しう僅倉殿と

ハ足利成氏の事也松永より考の事也松永ハ永録年中の企

又走元故実云惠林院殿代の事を記シテ走元廿人が

きぬまんげの海と小太刀をものれは有是又松永よりい

の事也宗五一冊云糸し書の事ありかきぬハいし我が紋を

必付はりの當付ハ一向のいしうあづる小袴もうきぬも目

ふきぬやういが能い云又うちけ肩衣ハ狼藉の由同書ハ

みえう宗五冊ハ宗五入道貞頼の法名也大永八年ハ記シる

書ハて松永より考る事也又伊勢下總守貞頼の法名也

のきぬ袴の事十四五冊ハ義用ありくいぬ又かのきぬ

殿中ハ義用より考る事也又伊勢下總守貞頼の法名也

モノ肩衣 夏法供古
 実ニモノノスアフリ
 殿中六召以シテ肩
 衣モ同前又淡川記云
 モノノスアフリ同タキ又
 ノ一殿中六無着イタ
 人ノ由前モ同前内
 一三ノ不苦イタ云
 ○伏見院ノ由時画カキ
 シ法盤上人ノ画傳ニ
 侍郎オト見ニシ者
 肩衣ニ六口ノ袴キタ
 ル体見タリ今川ノ
 後ノ大草紙ニ袖付
 ガル直垂ト云一見
 即肩衣ノ夏ヲ云ナ
 ルシ

四年伊勢備中守貞藤法名の記云云云松永より以承る事也
 一 肩衣といふ物上古より有也万葉集卷五山上憶良ガ作りシ貧窮
 問答ノ歌ニ曰風雜雨布流欲乃雨雜雪布流欲波為部母奈久
 中 アサフスマヒキカガフリ マカタキマアサガトゴト
 畧 麻被引可賀布利布可多衣安里能許等其等伎曾倍騰毛
 中 フタモチキマカダキヌノミルノゴト
 畧 綿毛奈伎布可多衣乃羨留乃其等和氣佐賀禮流可々
 ノノヲカタニウチガ
 布能尾肩尔打懸 下畧 布可多衣ハ布肩衣也袖ナクテ肩ニバカリ
 カルユ一肩衣ト云古今著聞集ニ下臈ノ
 著ル手ナシト云フ布着物ト云ヘルモ是也手ナシトハ袖ナキヲ云古
 ノ肩衣ニハヒダナシ本ハ賤シキ者ノ服ニテ小袖ノ上ニキルモノユヘ
 イツシカ賤者ノ礼服ノ如クニナリ今ノ世ニテハ武家ニテオシ出シタ
 ル礼服トナレリ鎌倉ノ成氏出陣ニ金襴ノ肩衣ヲ着セラレシ由
 鎌倉年中行事ニ見タリ後代ノ
 陣羽織ハ肩衣ノ變シタルナリ
 一 古ハ肩衣ヲ印シガキ後攝三光院内府記云半臂ハ如肩

大永七年二月十
 二日ニ水記ニ云
 室町殿中出仕供
 之衆各片衣小袴
 云々此片衣ト云
 ハ肩衣也下文ノ
 片衣ノ事ニハア
 マズ

衣ニテ有裏云々公家元東帯比装束の下ハ半臂ト云装
 束を志せし事也 半臂の袷も装束 圖式と云書あり 其半臂ハ袖あき物
 也印シガキあき物之古の肩衣ハ印シガキあき物ト云何しハ半臂の
 形を以てしめ有衣といひし事也之形似る故之今の肩
 衣ハ印シガキを以てしめ半臂の形ハ似る事ハあく大ニ遠る也
 一 片衣カヒイきぬらさの日記ニ為遠朝臣衣紅の片衣をきると云
 其下の文ニ為遠朝臣直衣紅帷カヒイトあり此帷ハ片衣ノ二字カタ
 ヒラト云むト外ヒトエの書ニ帷を片衣ト書る例を覓えず故ニ
 これを記し置片衣をカタギヌト云ふハ大ニ誤ある事
 帷カヒイといふものハあき物ト云ふ事ハ帷カヒイの意也裏あく片衣

上下ハ素襖袴ニ
 テ直垂ニテモ水
 干ニテモ何ニテモ
 ト下トノ支ナリ
 肩衣袴ニカキテ又
 一ナリ
 疎川記ニ小紋の上
 下ハ界儀ハ近
 年モナリトあり
 是ハ家ノ故又チ
 外ノ故トモ付
 ずして熱地を小
 紋ニ染ムトモあ
 り得也

是ハひびくありぬびくと云

一 中袴も古よりあり （シリシゴギ） 惠林院殿代 （の事を記す） 子云老元井人如

きぬまんばう海小太刀をまのれはく又小中あひひびくと旧

記ハいづも何りもあはすばう等を著るを小素襖と云

一 上下と云事今ハ肩衣袴を云古ハ是あは袴の事を云古也

常ハ素襖ハ小袴を著る者すあは袴の事をバ上下と云

一也上と下と同一云同一故ハ上下一對ありを云上と下と云

も紋も遠たるハ是あは袴といふあり

一 今の麻上下の袴の襪ハ是てひびくと云あひ引の袴ハ和を

記を細くしてそれぎらうひびくを取きて又よせひびくと云物の

記を共中一細くよせし記を取きて古風ハ近 （近） 年

仕出 （享保ノ比ヨリ秋） 也古風ハ記のものを惣括一曰袴づともさばう

記をともはを今ハも記をととをひびくと云こやう

の事ハ限古風をさうと云あり

一 上下と云名目上古の書ハ是ハ古事記應神天皇記曰爾其

兄曰若汝有得此襖子者避上下衣服量身高而釀麴酒亦山

河之物悉備設為宇礼豆玖云爾

一 今時長上下といふ人何りあやうく肩衣長袴といふ

長き下ハあれども長き上ハふき物なり

一 記ハこれハ仕立甲と云あはのめハ袴ハ長袴也是あはの袴ハ

同一若腰後腰シヤキも小白練を用ひ太き糸シヤキを上ぎり何れ後
腰木板を入敷板の上の両端を丸くする袖の巾フユも
糸も心ゆく菊も組借也地ハ紗生絹シヤキ織好シヤキを用意
ハ木蘭地モクランジ赤アカもモヘヤ萌黄紅朽葉クキイナキ其外何をも用去ふ多
紫萌黄紅ハ將軍家用の名也故平人憚定シヤキ今ハ
萌黄ハ不憚シヤキ

一 直垂ハ本ハ地下人五位至官の者の服也堂上の人乃着袴ハ
履き物ハ何れハ庶苑院將軍義満公の比より堂上元も若
用志の之も上も若めハ袖ぐりの袂何れ是地ハ直垂と
ワシヤキるもシヤキハ武家のも袖括シヤキ何れも今關東の制

ハ袖括ありシヤキ落けりあり

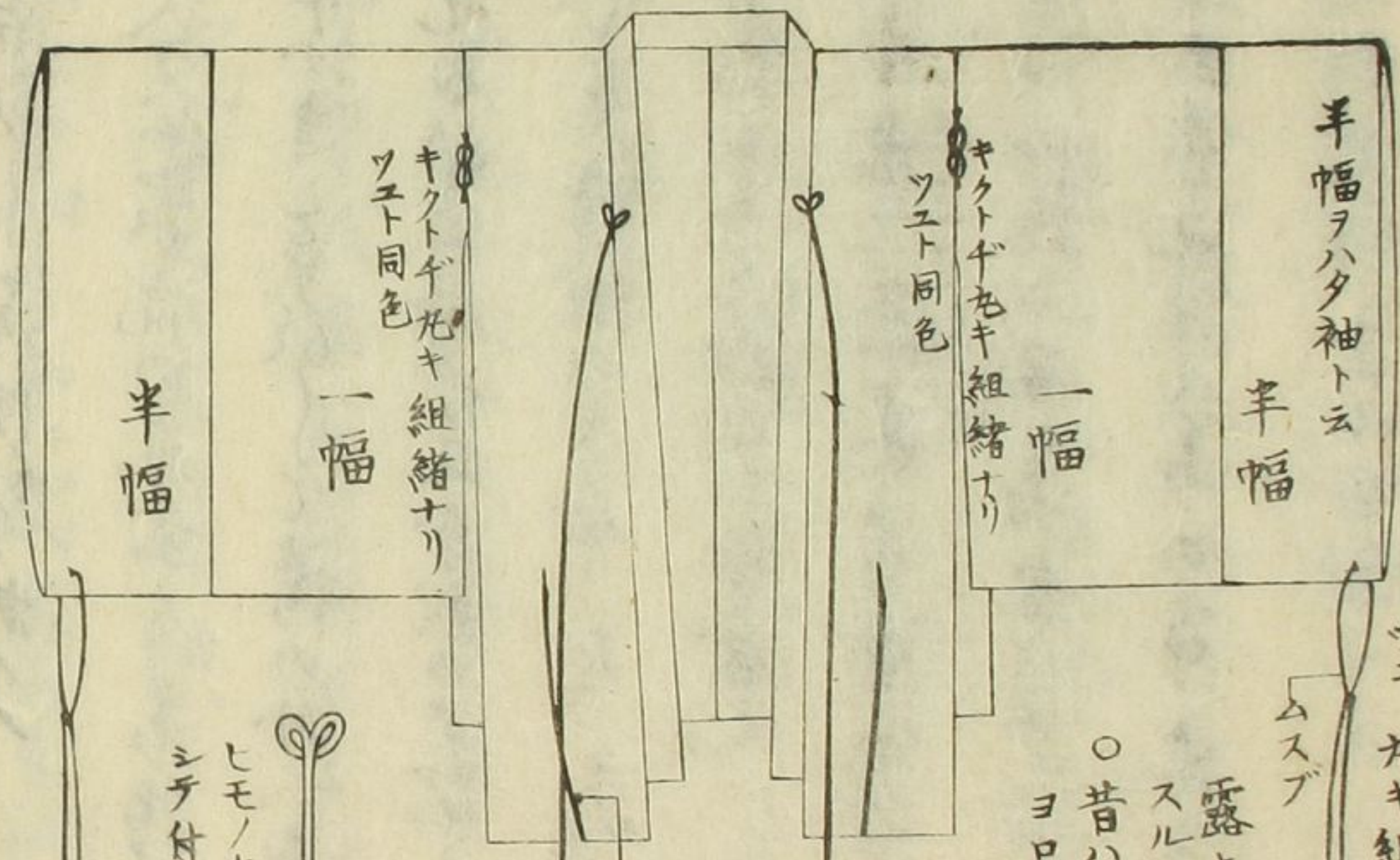
一 或人云今公家元直垂を若袴シヤキを見りハ直垂の巾を
袴の巾シヤキよりシヤキて袴の外シヤキ出シヤキて若シヤキ細き帯を上よ
里シヤキのけもハ直垂ハ是ハ武家の若シヤキ成シヤキと云是ハ赤シヤキけ
ひシヤキれとて略儀シヤキのきシヤキありとてシヤキりシヤキけシヤキ若シヤキハ略儀
也袴の巾シヤキよりシヤキハシヤキ也

一 ひとえ直垂と云ハ表シヤキ常のひシヤキれ也シヤキりシヤキの直垂何
故シヤキまシヤキぎシヤキぬシヤキるシヤキハ單シヤキ直垂と云ハ單シヤキ直垂をシヤキひシヤキたシヤキれ也
げシヤキりシヤキ云シヤキりシヤキ也シヤキりシヤキのシヤキ末シヤキハ記シヤキす

早直垂古ヨリテ
リ公家ニテモ武
家ニテモ紋付ル
事ハナシ今ノ武
家ニテモ紋ツケ
ラレタ

○直垂前

布直垂ハ布ハ幅狭キモナルコハ袖ヲニ幅ニスルナリ



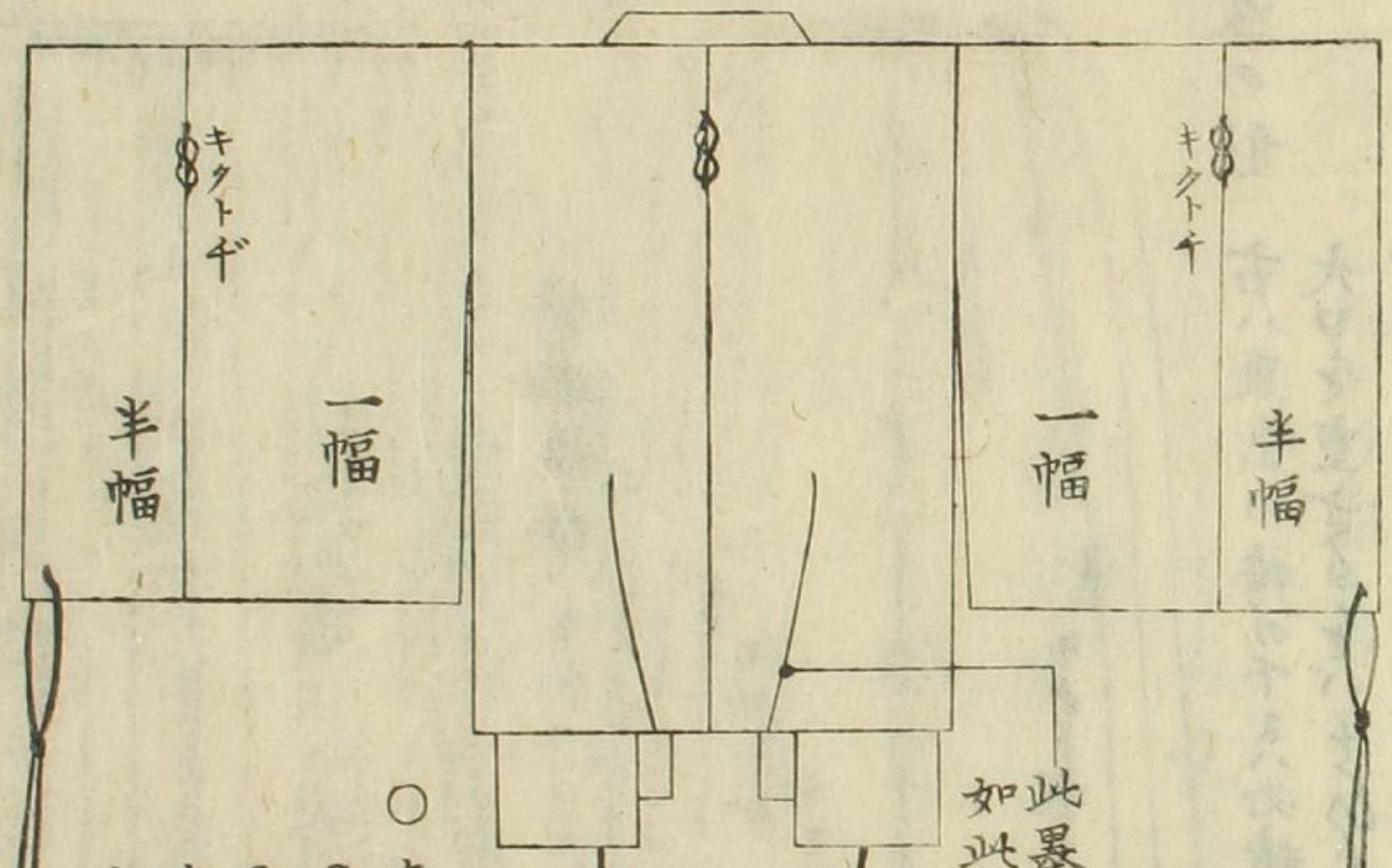
半幅ヲハ夕袖ト云

ツエ丸キ組緒也色定ラス
ムスブ
露キクトギムナヒモヲ草ニアスルコトモアリ布衣記ニ見タリ
○昔ハフサノキクトギヲモ付タリヨロヒ直垂ニモアリ

ヒモノカシラヲ如此ニテ付ルナリ

ヒモ 丸キ組緒也ツエト同色
着ルトキ此墨引ノ如クニムラ一ツトリテキレハ着タルカクキヨキナリコレヲエモンヲトルト云也左右トモヲナシ

○直垂後



雜記五

○直垂の下ハ白キ布ニテ直垂の如ク仕立てのりコトクシキ重祓キキタム是を大帷と云あり束帯の時の大帷と云ハ別也

此墨引ノ如クヒダラトリテ着ル也如此スレハ着タル所ヨキ也前後同シ

着スル時前後トモニスソハ袴ノ内エ入ル也

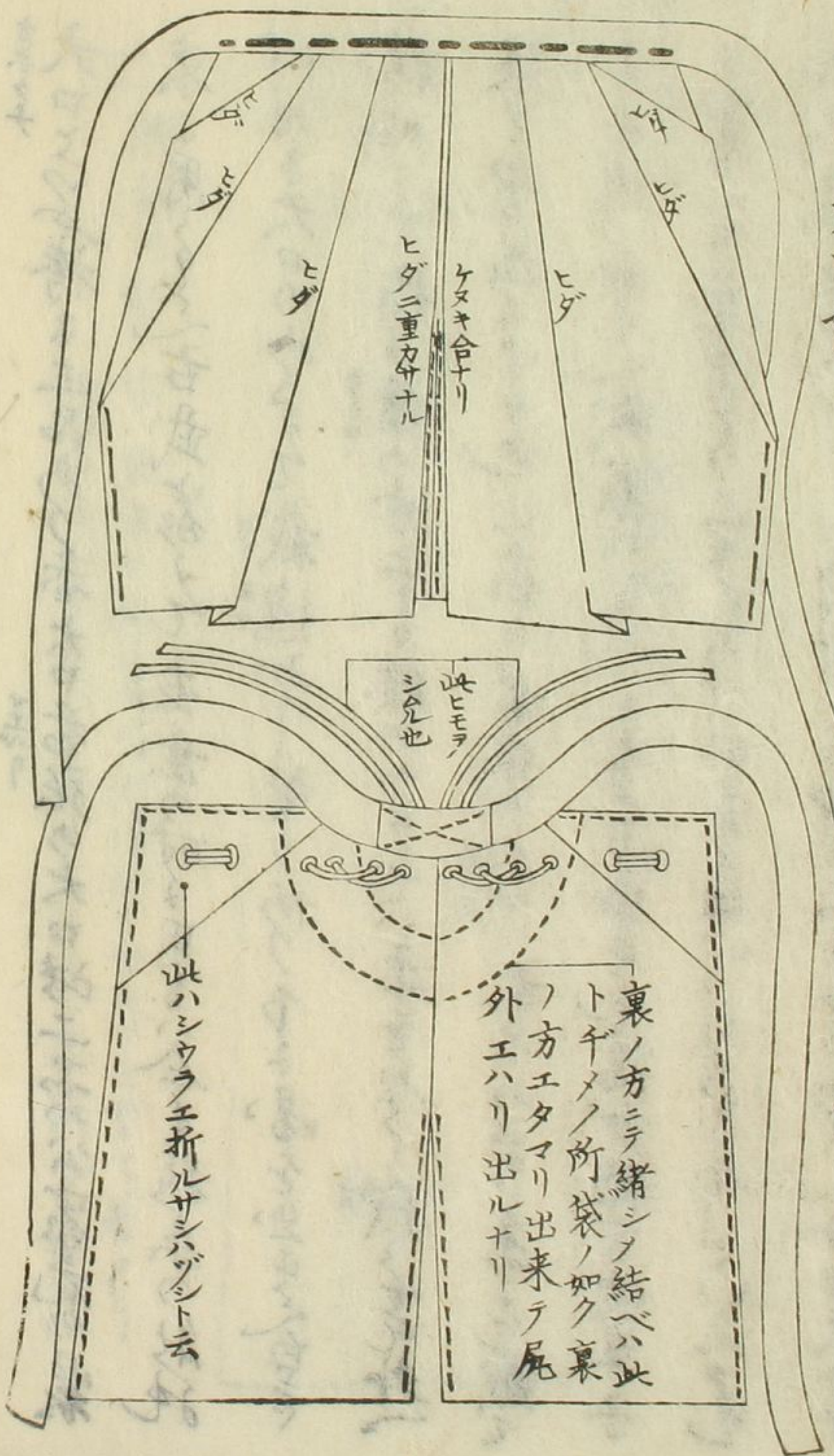
キクトギ如此ムスブ

ひろく大口のちぢ
 まりゆるがけはく
 主のきりりて移りを
 のきりりて移りを
 大口のちぢりて移りを
 ちぢりて移りを
 とちぢりて移りを
 ちぢりて移りを
 ちぢりて移りを
 ちぢりて移りを
 ちぢりて移りを
 ちぢりて移りを
 ちぢりて移りを

けし海を布とせしむ
 長サ八足ノカウマテトバックホド之或三尺アイリ
 七寸マキ九寸マキノヒシセ寸四方前後此
 口傳アリ但前張ノ大口ハ紐片方ニ附一筋ヲトリ合ムスブ也前ハ尋
 常ノ精好ニシテ後ハ大精好ニテスル也是武家ニ用ル所也

○大口前

○同後



一古の白垂の着やうハ先大口をきき板大のびらを白垂のちぢ
 若し次は白垂の下を若くも糸をちぢる見えたり今ち
 大のちぢり大口を用多りあり

一題文紗の白垂と云々題文と云々丸をちぢり半とよそ丸を
 を織る紗と云々白垂を作りたり也

一白垂垂の子糸と同書は法統よりん白き白垂は大切
 ちぢり糸を糸をちぢり見たり正月法統は對面糸の時公方極
 白垂垂の糸糸 豊後山廻年中行ふと元とちぢり又糸をちぢり
 糸垂垂の時又白直垂は金紋をちぢり時紙印好電見印見
 菊とちぢり糸をちぢり由ん元とちぢり又糸垂一冊指糸は惣別白き

杵垂をなましの是ハ公方様もして元服迄一段の注視小
なましの云々 紙ひわういん
ぜんよりのり

一 白き杵垂は金箔に紋を付る者ありすは注視小

よりて大さびらよ白きひられを幸祿又時よりて箔小
て我家の紋を付る者も幸祿よりて貞治六年三月廿九日

中殿出會 禁中和致
のり金 帯刀十人 將軍ノ供
ヲ帯スル役人也 左右は番々

曳列也其内左二番ハ伊勢七郎左衛門貞行地白の杵垂ハ
金箔を以て和らぎ蝶を押せ白太刀を佩と系圖の一本可

見えり承享二年七月廿五日義教公大将出拜賀の時
大将出拜賀と云大将ありありあり礼をす 帯刀十二番二行杵垂ハ金銀箔

を以て紋を押せと注元服記よりて白杵垂とハありきと
必白杵垂してありと云々

一 漆の杵垂も金銀箔に紋を付る者あり義教公の元

服記ハ永享二年七月廿五日大将出拜賀の時侍所赤松
伊豫守義雅ヨシマサ出立のるを記して僕ハ紺コの杵垂ハ銀箔に

文を押せとあり 僕ハ家来
のりナリ

一 直垂も素襖もぬきえものとも云る者ありびらふハ知れ

れども漆の杵垂のるをみゆ也表方の杵垂のるよりてはなき
素の杵垂のるはこれの漆拾公家のめしひひへ杵垂ハあり
かえものも能くあり寛正五年礼河原勅進能棧の

圖ツ申樂元サルカクニウもあは袴也初日ハ黄色二日ハ淺黄三日ハや元物
 とあり搦ずるふ公家方の装束もや元織物オリモノと云ふものをも
 ハ織物の上よぬハ物をとる也といひ是は准ジユンと考せし素襖
 古垂あどのやうに袖と云滌粒も下地を何色も滌んをよを
 別の色もて紋唐草あを際出する物あざう今どんすとい
 一あざう云類を極極うされ

一 表赤ウラウキの古垂と云物あり素襖もあざう赤ハきざあきざふ
 紋をぬひめ付は白く付するもの様ゆし古よりハ付は又彈正
 判官の人ハ地を黒く紋ハ蝶を付しれは素襖あう裏腰
 表と腰とを云く 余の官の人ハきざうハ常のうも赤ハ腰せいごや

表赤の古垂武家
 またうり用ひしハ
 あは古ハ公家も
 用ひしれし生せ
 忠見の家集も
 ある人のひこれき
 せんとあはらうを
 あんらうあのこと
 ますし「佐吉のき
 一しんそをあは
 みる付をうちけ
 ようらあはくとも
 中見のそをあは
 表を以てしれハ古
 ハ公家うりしハ
 のひこれきを
 れしあはし又
 表上古よりあり
 を知し生せな
 ハ拾遺集の佐吉
 生忠峯の子ハ天
 曆年中久也

うもあざうしきぬあざうしあはひもきくとあも常のこ
 紫草もあふのひもより少廣うどく菊とあ同大あう
 己終し又云大のびる表赤の時大くびる用る時と 纏子のきや
 ちんをまし云道照愚草と云うも赤の紋のるハ家この紋
 付ハ方もハ大略松竹露丸あを付ハ異相イサウあ紋あふ不付ハ
 色ハあきざうし又を外の色をも用ハはあひもの付柄も同
 前袖の下ハ三四寸つちをむまびさげハ大略紫草あは
 一直垂の腰の留換単並垂ハ表赤も同一る道照愚草と云帯
 の留換前腰ハあ結て取柄ハ後腰の帯さきの廣きまをたて
 留ハ条くすあ云腰の留換前も常のこく結てそれを

取よせし後腰のまきをひらげて膝の腰をほくそくほく

丸くして上より下へ二重丸おのひ苗べーたをへ

此也 あまの老のこころ結といふ腰の事也結は対立結なり

糸腰の紐のより上より下へ 引通してを巻あり

一 糸成次才古実云云公家の法方不

取よせて帯ひたりしはほくおまらめをさすは

うもあも大いびりも因前也云貞丈云今ハ腰を巻る

あまのを長くくれ下る人あり古ハあまのあり

一 糸成次才古実云云公方様はこれ糸成年よりしは

ハ糸をわくめされ也法年よりこれ糸成次才くハ糸成

くみされ也糸成くす云云公方様はこれ糸成ハ糸成

以下不定ハ但正月ハ白さをむるハ高倉殿ハ調進ハ不極

法年よりこれハ何れの糸もうす成ハ

一 今の世布の糸垂ハ家の紋付を大紋と名づく布糸垂ハ

鹿苑院殿 義端 乃時より始也はるハ三光院内府実澄公

の記ハ見えし布の糸垂ハ室町記ハもええし大紋と云

名 西三条装束 又 抄ニ見タリ 糸垂ハ家の紋を付る是ハ

布ハあまの精好也今の大紋の紋付格古の裏糸垂の紋の

付糸をうしし物ありき大紋と糸垂と似る物あり

とも遠くハ糸あり紐菊と糸垂 スアツハ草也大紋ハ 古の裏

室町記ニ云所方
清野橋八幡宮に
糸籠中畧折鳥
帽子直垂
布直垂著は家
以紋柄コキ家

増流月草の花の
来云別者八道
の初よりあきま
たりあきま
ぬのひまれと云
ぬうちきと云
○肥前之人と云ハ公
方一随脱しそ万
幸巾用を兼云
家元の事と云云

布衣記ニ云福布
直垂三赤草之ヒ
モ也云、布衣記
ハ永仁三年ニ書
タル書也鹿苑院
殿ヨリ七十三年
以前也然レハ鹿
苑院殿以前ヨリ
有之也

平家物語ニ云キ
ノ直垂見タリ

亦ハ草を用紋の付不^レ大紋も素襖表亦も上ハ同^一事也
大紋の袴ハ後腰を白練よき^レ故腰板の亦^レ紋あり素
亦も同^一素襖ハ腰板の亦^レ少^ク紋を付^ル大紋ハあひ引^ニ紋
て鹿^シのあ^リう^ニ又^レ紋あり素襖ハ鹿^シの何^レう^ニ又^レ紋ありあひ引^ニ
紋何^レ大紋ハ袴の裾^コ股^マのあ^リう^ニ又^レ尤^ニ又^レ紋あり^ルもあ^リま^ニ
あ^リ腰板の上^ノか^ド大紋ハ尤^ニ素襖ハか^ドあ^リ古^ノのあ^リま^ニ
大紋の何^レ袴のあひ引^ニ紋あり^ル鹿^シのあ^リう^ニ又^レ紋あり^ル也
布直垂の^リ三光院内府記云鹿苑院殿代^チ肥前^キ之人^ニ
給^リ布直垂^ハ其^レ以来^ニ諸家^ニ差^レ用^ス之^ハ一向^ハ本儀^ハ雖^レ然^ト大
臣家^ハ差^レ給^リル^ル當^レ家^ニ公^ノ可^レ卿^ノ為^レ講^ノ叙^ハ平生^ニ祇^レ儀^ハ之^レ条^ハ依^レ也

入魂^ニ内^ノノ時^ニ給^リ布直垂^ハ此^ノ由^ニ始^メ故^ニ入^リ道
^{称名}院 右大臣拜任之上者家之儀為各別仍布之直垂相止^ス
惣別十六歳迄ハ諸家一同^ニ差^レ白^ニ直^垂ハ色^ハ之^レ直^垂ヲ^ハ不着
之^レ諸大夫同前^ハ云^ハ是^レを^レ之^レハ布直垂ハ義満公の時代
より始^メ之^レ也
一 ^{ヒキカキ}曳^カ袴^ノの直垂^トい^フ東鑑曾我物語^ニ云^ハ元^ノう^ノ布^ノの直
^{カキ}垂^ハ材^ハ洗^ハを^レ引^ク也
一 ^{キン}金^ハ箔^ハ之^レ平^ニ紋^ハ之^レ直^垂の^リ永享九年室町殿行幸記云^ハ帯^ハ刀^ノ十
^{ヒヤウモシ}五^ニ番^ハ皆^ニ金^ハ箔^ハ之^レ平^ニ文^ハ之^レ直^垂帯^ハ金^ハ太^ハ刀^ノ云^ハきん^ノむ^ノの^レ平^ニ文
^{キン}と^ハ熱^ハ膝^ハを^レ金^ハみ^ハの^レき^ハ金^ハみ^ハの^レき^ハと^ハ金^ハ箔^ハ見^ル
^{タミ}だ^ミた^ルキ^ハま^ニた^ルの^レキ^ハと^ハ家^ノの^レ紋^ハを

付^{ヒタシ}てひやうもんを付^{ヒタシ}る也 平文とハ^{ヒタシ}約文の事也ひやう
もんハ^{ヒタシ}杣素袍あるの紋をきくふつと^{ヒタシ}也 今のか賀
紋と云物のごとく一糸^{ヒタシ}少書云一限のまれの可ハ^{ヒタシ}杣
を今^{ヒタシ}るがきくふつと^{ヒタシ}我紋を^{ヒタシ}緑青とて云^{ヒタシ}し^{ヒタシ}それを大帷
ハ^{ヒタシ}杣^{ヒタシ}る^{ヒタシ}る^{ヒタシ}あり又^{ヒタシ}銀^{ヒタシ}ご^{ヒタシ}ふ^{ヒタシ}も^{ヒタシ}る^{ヒタシ}も^{ヒタシ}あり花^{ヒタシ}法^{ヒタシ}不^{ヒタシ}行^{ヒタシ}事
記ハ^{ヒタシ}云^{ヒタシ}太^{ヒタシ}刀^{ヒタシ}帯^{ヒタシ}皆^{ヒタシ}き^{ヒタシ}ん^{ヒタシ}ぎ^{ヒタシ}ん^{ヒタシ}の^{ヒタシ}ひ^{ヒタシ}や^{ヒタシ}う^{ヒタシ}もん^{ヒタシ}の^{ヒタシ}杣^{ヒタシ}素^{ヒタシ}着^{ヒタシ}る^{ヒタシ}見^{ヒタシ}ん
し^{ヒタシ}り杣^{ヒタシ}素^{ヒタシ}の^{ヒタシ}熱^{ヒタシ}袴^{ヒタシ}を^{ヒタシ}銀^{ヒタシ}み^{ヒタシ}ぎ^{ヒタシ}の^{ヒタシ}銀^{ヒタシ}ガ^{ヒタシ}ミ^{ヒタシ}ニ^{ヒタシ}
ス^{ヒタシ}ル^{ヒタシ}ト^{ヒタシ}シ^{ヒタシ}て^{ヒタシ}紋^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}約^{ヒタシ}文^{ヒタシ}を^{ヒタシ}
付^{ヒタシ}る^{ヒタシ}も^{ヒタシ}銀^{ヒタシ}箔^{ヒタシ}と^{ヒタシ}く^{ヒタシ}だ^{ヒタシ}と^{ヒタシ}う^{ヒタシ}を^{ヒタシ}云^{ヒタシ}也

一直^{ヒタシ}杣^{ヒタシ}狩^{ヒタシ}衣^{ヒタシ}あ^{ヒタシ}ど^{ヒタシ}い^{ヒタシ}し^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}毎^{ヒタシ}位^{ヒタシ}無^{ヒタシ}官^{ヒタシ}の^{ヒタシ}人^{ヒタシ}中^{ヒタシ}間^{ヒタシ}小^{ヒタシ}者^{ヒタシ}あ^{ヒタシ}り^{ヒタシ}も^{ヒタシ}着^{ヒタシ}け^{ヒタシ}り^{ヒタシ}也^{ヒタシ}大^{ヒタシ}的^{ヒタシ}犬^{ヒタシ}追^{ヒタシ}物^{ヒタシ}笠^{ヒタシ}楯^{ヒタシ}あ^{ヒタシ}ど^{ヒタシ}の^{ヒタシ}旧^{ヒタシ}記^{ヒタシ}を^{ヒタシ}見^{ヒタシ}ん^{ヒタシ}知^{ヒタシ}る^{ヒタシ}べ^{ヒタシ}し^{ヒタシ}今^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}武

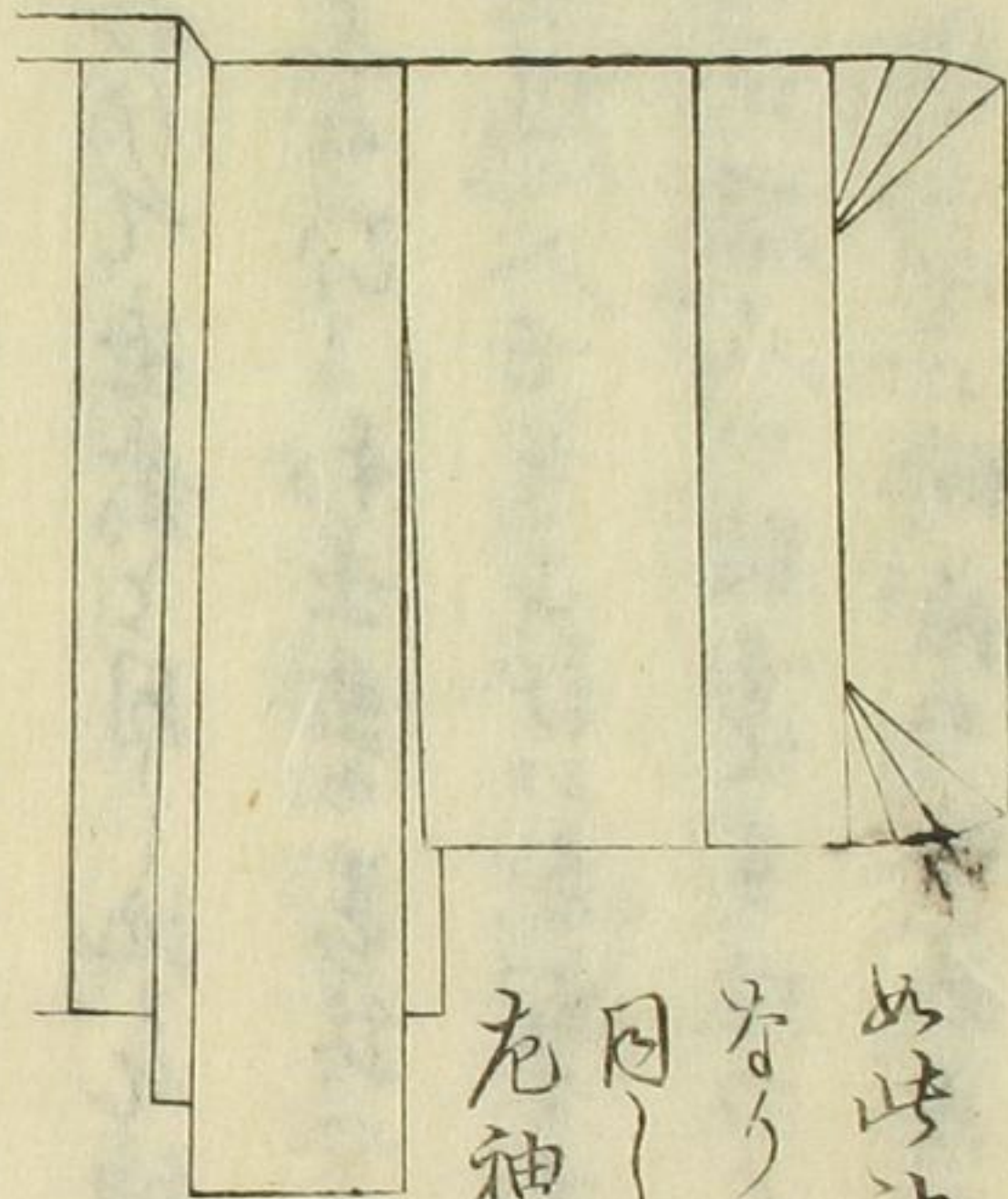
家^{ヒタシ}で^{ヒタシ}侍^{ヒタシ}従^{ヒタシ}以^{ヒタシ}上^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}杣^{ヒタシ}美^{ヒタシ}四^{ヒタシ}位^{ヒタシ}の^{ヒタシ}人^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}狩^{ヒタシ}衣^{ヒタシ}諸^{ヒタシ}大^{ヒタシ}夫^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}大^{ヒタシ}紋^{ヒタシ}を^{ヒタシ}次^{ヒタシ}
毎^{ヒタシ}位^{ヒタシ}世^{ヒタシ}友^{ヒタシ}の^{ヒタシ}人^{ヒタシ}布^{ヒタシ}衣^{ヒタシ}其^{ヒタシ}次^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}素^{ヒタシ}襖^{ヒタシ}と^{ヒタシ}淨^{ヒタシ}法^{ヒタシ}を^{ヒタシ}定^{ヒタシ}め^{ヒタシ}り^{ヒタシ}加^{ヒタシ}
座^{ヒタシ}の^{ヒタシ}事^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}正^{ヒタシ}代^{ヒタシ}と^{ヒタシ}ふ^{ヒタシ}し^{ヒタシ}て^{ヒタシ}法^{ヒタシ}式^{ヒタシ}か^{ヒタシ}り^{ヒタシ}事^{ヒタシ}也

一 杣^{ヒタシ}素^{ヒタシ}袖^{ヒタシ}袴^{ヒタシ}の^{ヒタシ}括^{ヒタシ}の^{ヒタシ}事^{ヒタシ}は^{ヒタシ}供^{ヒタシ}故^{ヒタシ}実^{ヒタシ}云^{ヒタシ}淨^{ヒタシ}供^{ヒタシ}の^{ヒタシ}可^{ヒタシ}袴^{ヒタシ}の^{ヒタシ}事^{ヒタシ}を^{ヒタシ}皆^{ヒタシ}
ハ^{ヒタシ}入^{ヒタシ}い^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}見^{ヒタシ}ま^{ヒタシ}る^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}正^{ヒタシ}代^{ヒタシ}の^{ヒタシ}方^{ヒタシ}を^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}と^{ヒタシ}お^{ヒタシ}し^{ヒタシ}入^{ヒタシ}い^{ヒタシ}も^{ヒタシ}い^{ヒタシ}づ^{ヒタシ}い^{ヒタシ}袴^{ヒタシ}
の^{ヒタシ}方^{ヒタシ}を^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}い^{ヒタシ}ぬ^{ヒタシ}る^{ヒタシ}も^{ヒタシ}い^{ヒタシ}又^{ヒタシ}表^{ヒタシ}お^{ヒタシ}あ^{ヒタシ}ど^{ヒタシ}の^{ヒタシ}時^{ヒタシ}も^{ヒタシ}す^{ヒタシ}袴^{ヒタシ}を^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}と^{ヒタシ}の^{ヒタシ}
し^{ヒタシ}の^{ヒタシ}た^{ヒタシ}敷^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}不^{ヒタシ}可^{ヒタシ}紐^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}く^{ヒタシ}を^{ヒタシ}を^{ヒタシ}付^{ヒタシ}四^{ヒタシ}五^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}斗^{ヒタシ}志^{ヒタシ}の^{ヒタシ}事^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}
紐^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}云^{ヒタシ}く^{ヒタシ}按^{ヒタシ}古^{ヒタシ}代^{ヒタシ}常^{ヒタシ}着^{ヒタシ}用^{ヒタシ}の^{ヒタシ}杣^{ヒタシ}素^{ヒタシ}ハ^{ヒタシ}袖^{ヒタシ}口^{ヒタシ}も^{ヒタシ}い^{ヒタシ}づ^{ヒタシ}い^{ヒタシ}の^{ヒタシ}
袴^{ヒタシ}も^{ヒタシ}す^{ヒタシ}と^{ヒタシ}ぐ^{ヒタシ}ら^{ヒタシ}あり^{ヒタシ}し^{ヒタシ}と^{ヒタシ}思^{ヒタシ}ゆ^{ヒタシ}お^{ヒタシ}あ^{ヒタシ}り^{ヒタシ}と^{ヒタシ}考^{ヒタシ}へ^{ヒタシ}る^{ヒタシ}事^{ヒタシ}極^{ヒタシ}敵^{ヒタシ}
諸^{ヒタシ}大^{ヒタシ}夫^{ヒタシ}尾^{ヒタシ}崎^{ヒタシ}大^{ヒタシ}和^{ヒタシ}守^{ヒタシ}祝^{ヒタシ}云^{ヒタシ}常^{ヒタシ}の^{ヒタシ}杣^{ヒタシ}素^{ヒタシ}袖^{ヒタシ}の^{ヒタシ}端^{ヒタシ}を^{ヒタシ}袋^{ヒタシ}縫^{ヒタシ}

しそ其内一結を通しと扱下一結り此古実を失て今
袖の中一帯一帯を付るそ袴もくを志むも何れハ袴
のまを袋纏うして其内ハ結を通しと物とんえり
されハ膝口を志むる時ハきやけんをす敷之足らびと
くも村ハきやけんを用ざるあど馬上市供の時ハ習を用
るあト括ゲグ又まるあどカキタチ歩立市供の時ハ上括シマツケとんえり
けんを用るあど一猶田記を考して一猶澄書也古代ハ長
袴ハ何れハ長くしとあきとんぬりやの時と
あどすもふ長過さハ不宜あど一活供故実云まあかの下ハ
ちどめあどの本儼まとい云

一 虫垂着物の多し或人談云正徳中近衛殿は居クウキヨ宮居志給ハ
頃大樹公御臺所の
活父目そそ人ハ面カ舎カ指カ賞カの上ハ虫垂
をうもつけて虫垂と同地ハ細き帯を袴衣のあて腰の
めくも志あひハ虫垂の着物の本式あど一虫垂のまを
を袴の内へ入てきこむハ本式あど一貞丈云
虫垂ハ元庶人トコシの服と高位の人ハ服は何れぞれも言位
の人ハ内カのハ内カの付着用せり半あり純近侍
殿も内カと志あひあきされどり袴カは志あひあどゆ
うもつけて志給ハ也本式の着物は何れハ且下ハ指貫を
新故上下具して志あひハ遠く

一 素襖 素襖あはる袖茶の方よりあめんをとるひざのんをとりてあ
 ひざをとりてあ
 見とる付 本式よりあきるあれども手をばつるより
 きあさるよりあきるがよきあり



此袖の茶の方をひざを取
 たり素襖もあきるも
 同し左右も同しあきる
 左袖斗思を何れもあき
 此圖ハ補入也

一 巾着 巾着と云は出来合の巾着の事巾着ハ侍ノ字也町
 字を用るハ此也 商人の方より深々仕立置て買ふ事商人

を待故も巾着と云す巾着と云すもや巻も巾着と云すも
 皆同じこと也

一 加賀ぎぬの事 武家もあめん古大的犬追物がともあめん
 る旧記より単の狩衣あり表あり狩衣より夏ハあめん
 狩衣より表ありを用ゆ 今の武家よりあめん 五位以上の織物
 六位以下の浮文を用ゆ 浮文とはあめん 今定若年の耐ハ浮文
 とくめんがらをけ織はあめん 盛年の耐ハ堅文とくめん
 がらをあつめあめん 織也浮文ハあめんがらを解く堅文也
 遠く付も也 袖はあめんハ十五歳未満ハ毛ぬきあめん
 右よりの糸をあつて用ゆとくめんよりとあめんより目

左衛門右衛門をあら
がねのひびきけぬき
金也のちりきり
毛を毛抜形と云

名目抄ニ布衣始
ホウイハシメト
訓アリホイトヨ
ムハ不知ヨミ也

○狩衣ヲ布衣ト云
ノ遺書ハ役名ノ
部布衣ノ後ノ条
ニ記ス也布衣ト
狩衣ヲ別ツハ今
世江戸ニテアノ
也分テ云ベキナ
ラバ有文ノ狩衣
無文ノ狩衣有文
ノ布衣無文ノ布
衣ト云ベキ也

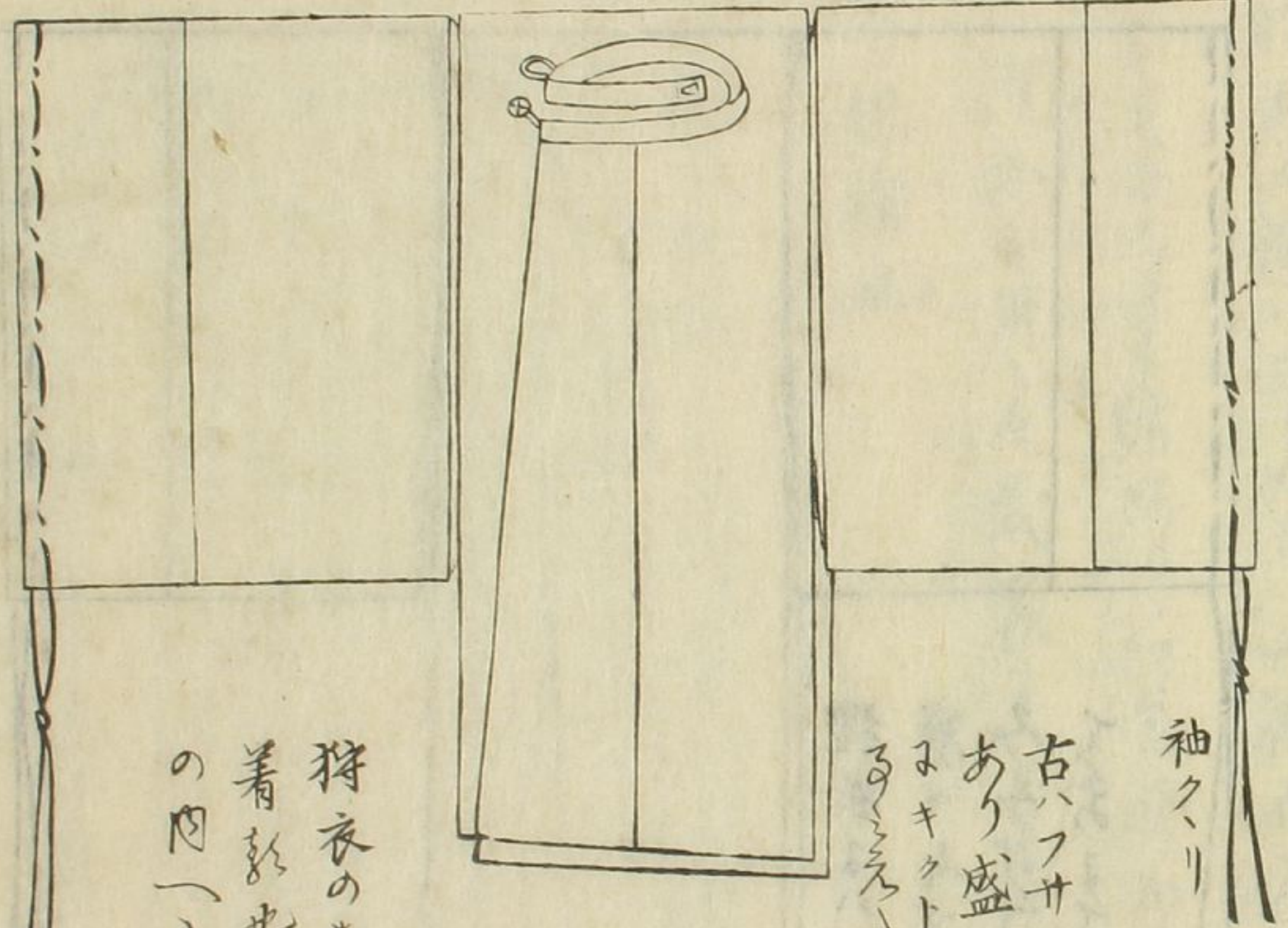
毛抜の頭のめくお合也若き人の落年の組と云う事き平き
組を用也（さげもの）老年の人の丸き組結一まぢを用也組乃
き不定老年をど色うすし狩衣の家方は色く故実阿る
画々奇如べし

一 布衣と云ふ狩衣の事古將軍宗氏系内などの仕供にあつた
の役といふ事ヲ狩衣を著し法劔を拵り役也わろい太刀をき
と云ふ事ヲゆゑはまき 帯刀とあてたらをき
と云ふ事ヲゆゑはまき 今ハ織文何れを狩衣
と云へばあきを布衣と云おせり古をきとて狩衣の事を
布衣と云又いふしわろいと云今をわいと云是今世江戸
武家の詞なり

狩衣ハ単狩衣も裏あり
狩衣も有り裏と表と向
色ありをみしめたりきぬ
しめ表と裏と色の遠
くハ二重狩衣と云す
表と裏との色はよりてき
の名あり右ニそりぎぬ
ことハ布衣記ハ見代
布衣記ハ伏見院代
永仁三年の書あり

○狩衣前

小狩衣ト云おハ半尻の
子也わりぎぬのりしめ
一尺けりみしめきぬ
後寺羽院宸記建保四
年四月十八日ノ条云聊着
小狩衣於東面壺西縁上
北面等参有和歌沙法云



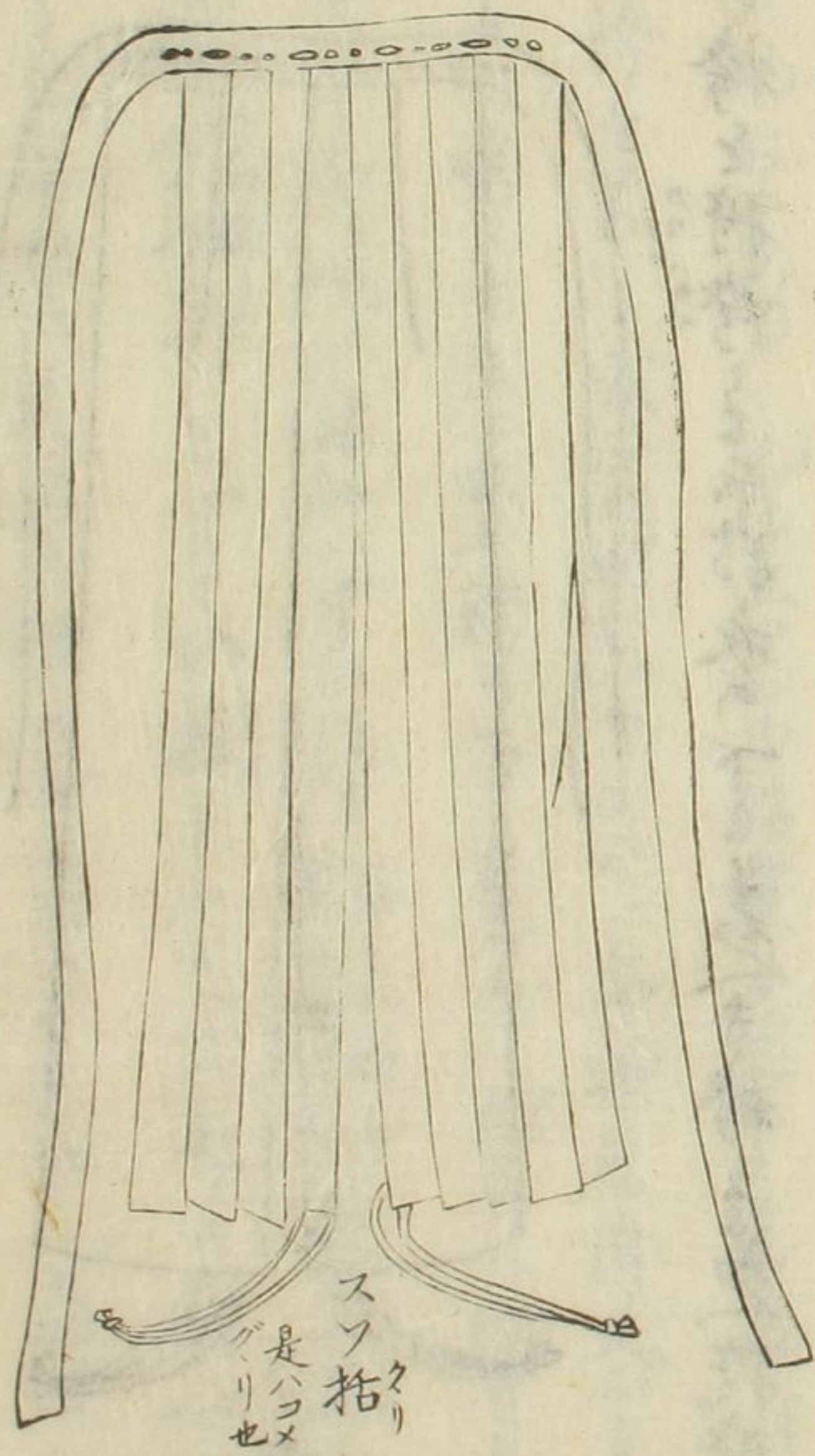
袖ク、リ

古ハフサのキクトガを付し
あり盛衰記ハ渡辺競ガ狩衣
ハキクトガ大ききものなり
るしめたり

狩衣のまをハ袴の外也即ち
着新也犬追物をの耐ハ袴
の内ハ入也

○ 指貫前
サシヌキノミ

雜記五

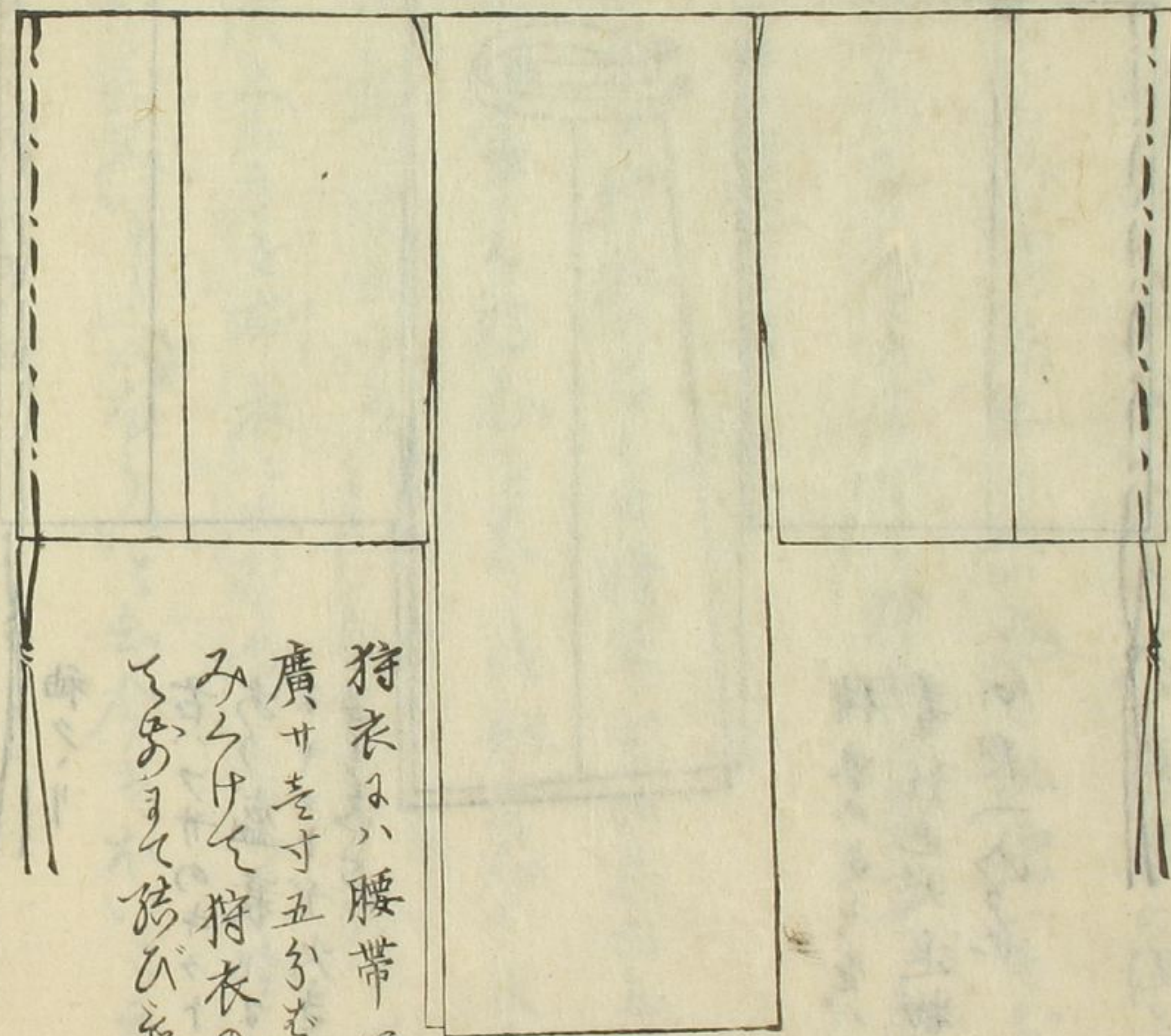


廿七

スツ括
是ハコメ
グリ也

一 狩衣の時着る袴ハさぬきと云袴也色ハ淺黄あり腰より上
 ぎありまをふくむ緒ありくむ袴あり此ハ平縮無文あり
 公家ハ紙摺を用ふる武家ハハもんがらあきを用ゆる也
 緒ハ白き組緒也

○ 狩衣後



狩衣ハ腰帶何れともざれ瓦
 廣廿五寸五分をとりあてたる
 みらけに狩衣の上より後よりあ
 とあまそ結ひ並あり單廻り也

廿六

古今著聞集卷八
 好色ノ部五葉書
 寺田宮子と云
 此節をありて中
 彼沙の両面の水干
 袖はむげう後居
 たるをぬかすけり
 家の正とこの袴を
 たり云く両面と表
 裏おしりもまを
 一又ぬいものを
 ともあり
 扶桑書記をよ承
 早トアリ
 東鑑卷十三佐義
 ノ水干と云う

長袴の代はれ用は後より少くして花はゆりの時の足
 見ゆい尾就はれ又云はあふちの留くさぎぬおぎの留あど地
 紋の多きと圓よこぬが花と一云く小袴は紋付多き
 一葛袴と云もふち布と縫る指貫也まそのくくその所を
 指のきれを縫りぎさくくを結を通まき着布をハこくして
 くらぬぬぬ大的の耐水干ふち袴を志まらる大的の書
 見(こり)まをよはく指のこけハ
 七八寸まのりあり
 一水干の多仕立扱狩衣のごとく袴は志垂の如く地ハ紗袴好
 練平指太之あり色も定あり多ハ白を用多し菊と云ハ紋を
 おしりて菊の衣のごとく平くして一和より下りて付るあふ

一而後ハ四所付の紐ハ丸組の結也きくとがも紐の色も定
 茶の紐ハえうの上と云ふ付る後の紐ハ志垂の後の真中ハ
 付る之若紐短く後紐長し大的の時ハ紋朽葉水色木の
 水干人の年の後よりく深べ一紋ハまの家の紋をぬひ物
 目まど一と大的の志見へり武家ハ紋を付る公家ハ紋
 付るれど今時蹴鞠の時水干と志垂の物ハ水干ハ何れハ
 志垂ハ似る物也蹴鞠の水干ハ志垂井家
 一水干官服ハあは官位あきと云ふ物ハ今昔物語卷十六伯
 耆守経國ハ四人を殺しける物持ハ在廳の友人をほかりて藏
 をひくせて見ると年三十むらり男のいりり水干装

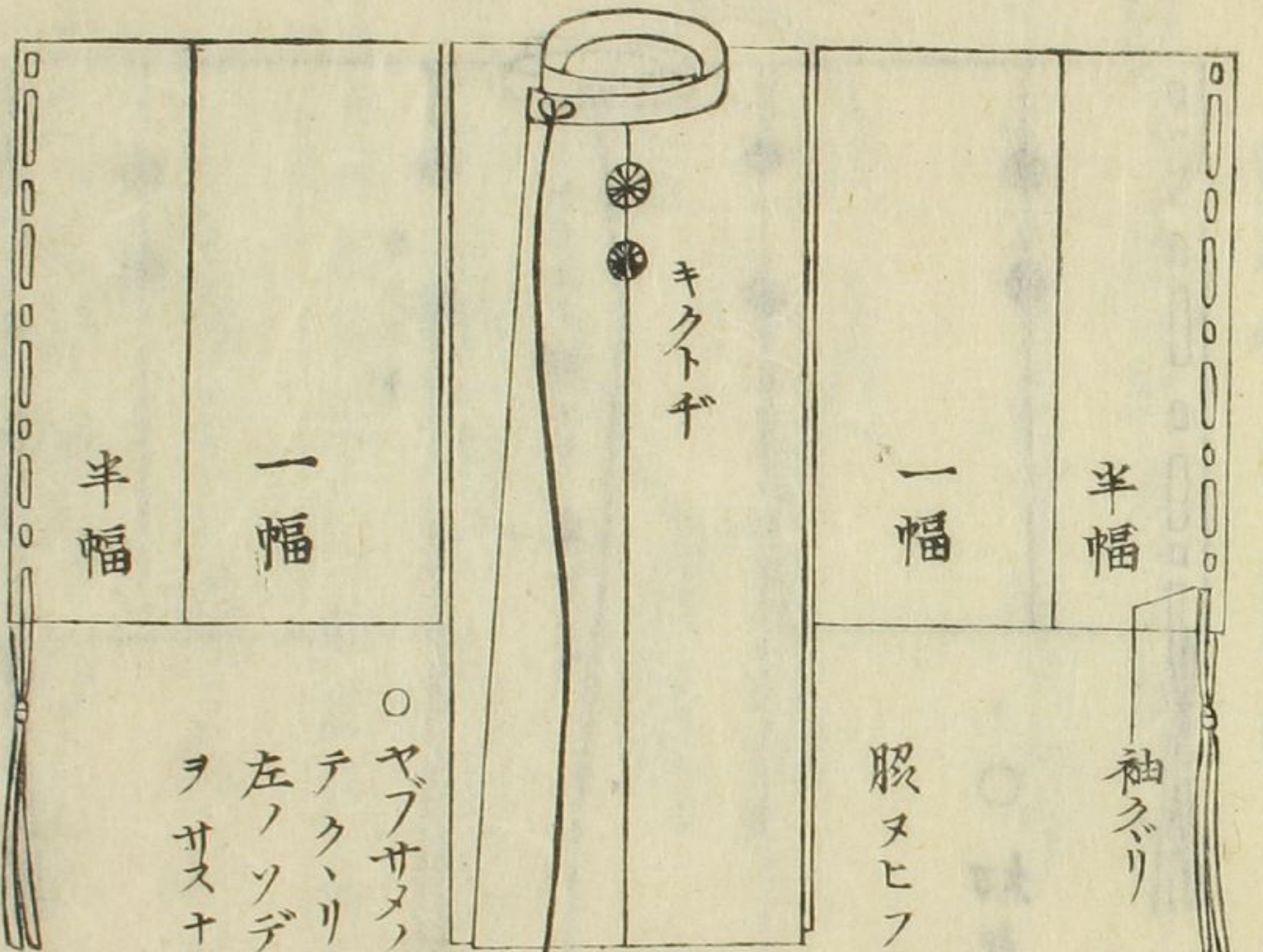
先大白水干之車新
野間答野宮定基卿
云凡水干とて幸ハ
甚しき腰洗也
愚業卿や試み此服
ハ遊宴の服よは得
もの儀よは干の字水
涯の注有之は川
道遠かよ用より
出来ぬと存しそく

先大白水干之車新
野間答野宮定基卿
云凡水干とて幸ハ
甚しき腰洗也
愚業卿や試み此服
ハ遊宴の服よは得
もの儀よは干の字水
涯の注有之は川
道遠かよ用より
出来ぬと存しそく

来しを引出し又卷三十二觀硯上人在俗の時賊を助て箱
布を得る物語は五十はうりあふ物をりしき男水干装束し
お出の太刀帯を郎等世人半具しそあひてそ衣の卅半の
男も五半の男もぬも也古ハ遊人たもあ干をきりし況
やあハ程あ干きりしきり推し知し水干ハ官服にあざり故
推もきりし那也

一西三条装束抄云水干紗も平絹も又もハ白
をも何色もくも大納言の時きりし内し着利し又陽明家
よハ大臣又希途の後もぬ長絹を舞を服用之尤不審也

○水干前



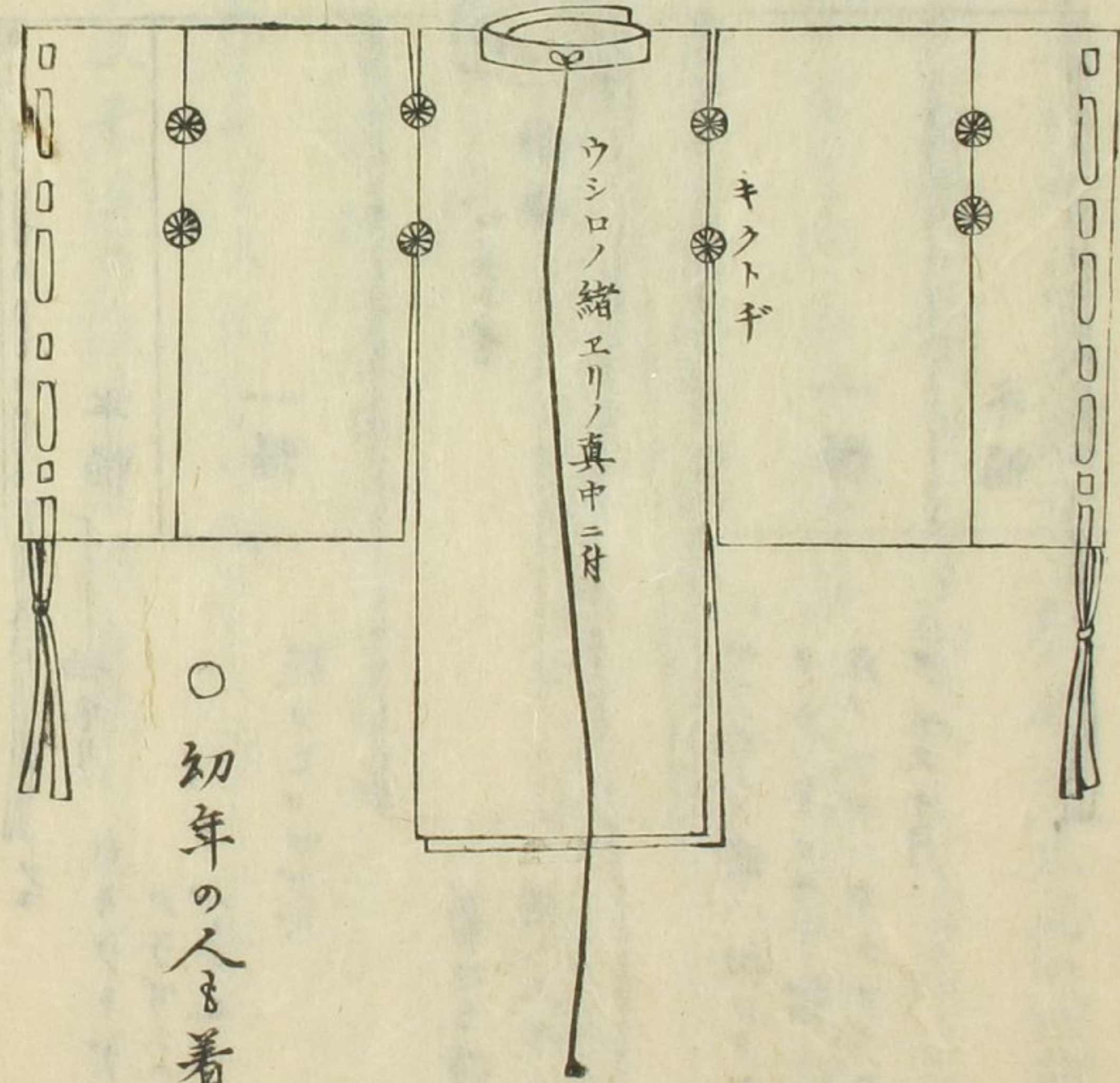
袖スリ ○キクト干ノ大サハ極リ
カ子ガミニテ一寸五六分
ハカリ也
服ヌヒフサガズ
着はる時まは袴の
内へ入て着る也

○マフサメノ時ハ袖ハラ右ノ手クビニ
テクハリヨセテ緒ニテユヒラク也
左ノソデハカタヌゲ也其上ニコテ
ヲサスナリ

雜記五

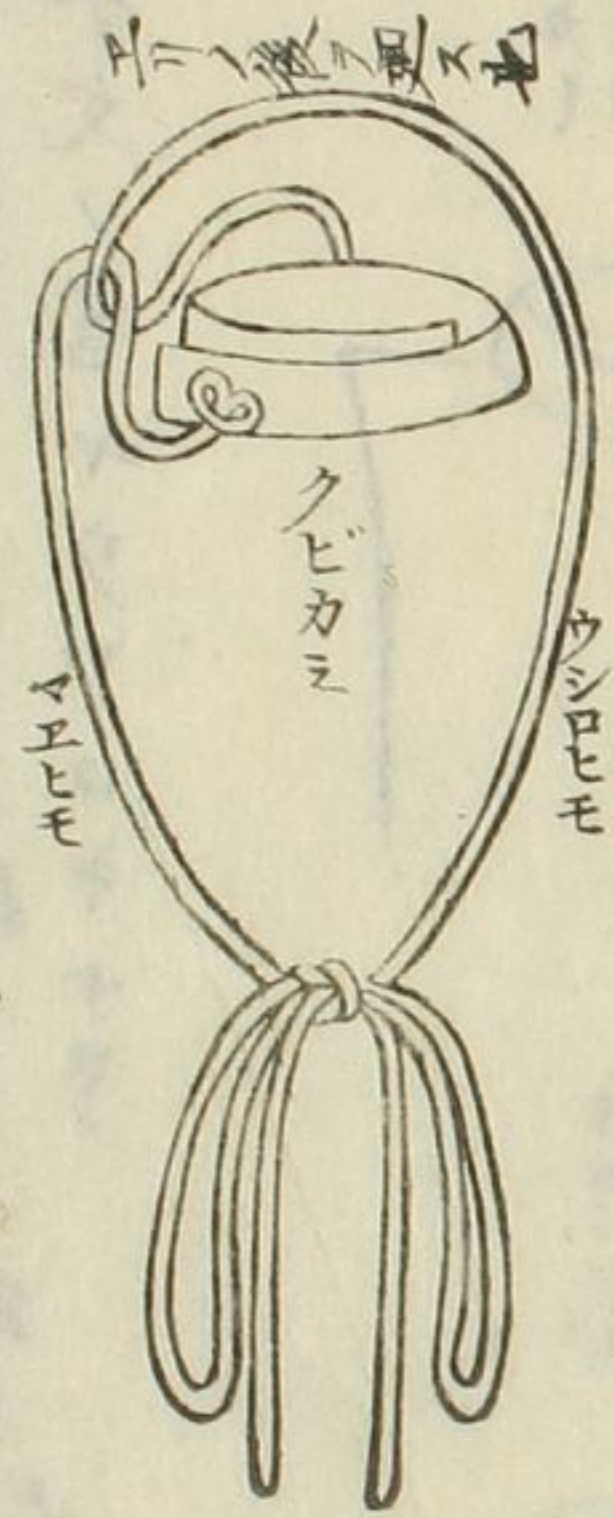
水干

○水干後



○幼年の人も着る物也

一水干のひもの結扱前の結と後の結とまちがふかぢりてあり
 緒ハ前引き後の子ハ裏の後を廻して左の肩の上より
 お引きして右より日あふ結が有り

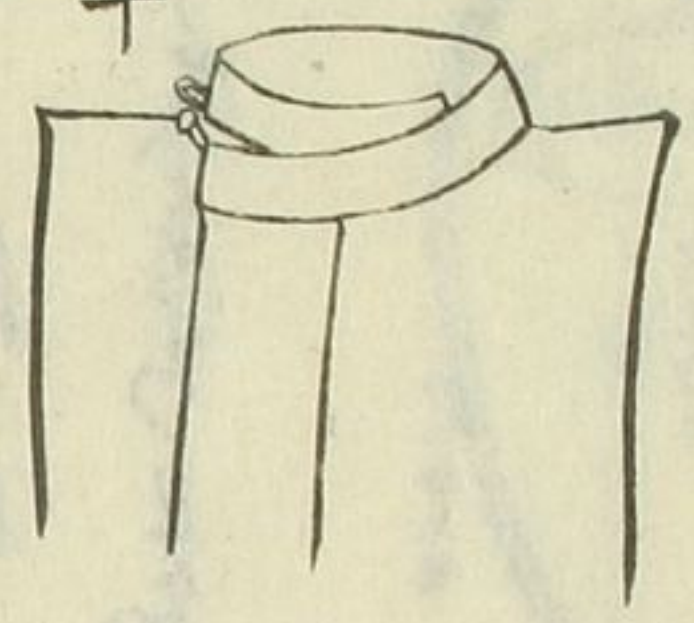


一又くびかこのかぢりを内一折入たりくびあして着る事有り
 永綱抄高倉家の書也 上下水干ハ幽玄ユウゲンナル間也上ハ前後の短
 き物也くびかこを内さすまよおして着るのゆゑもし美ゆをたう
 くびと云也たりくびハ紐ありたりくびありハ衣の紐を肩より

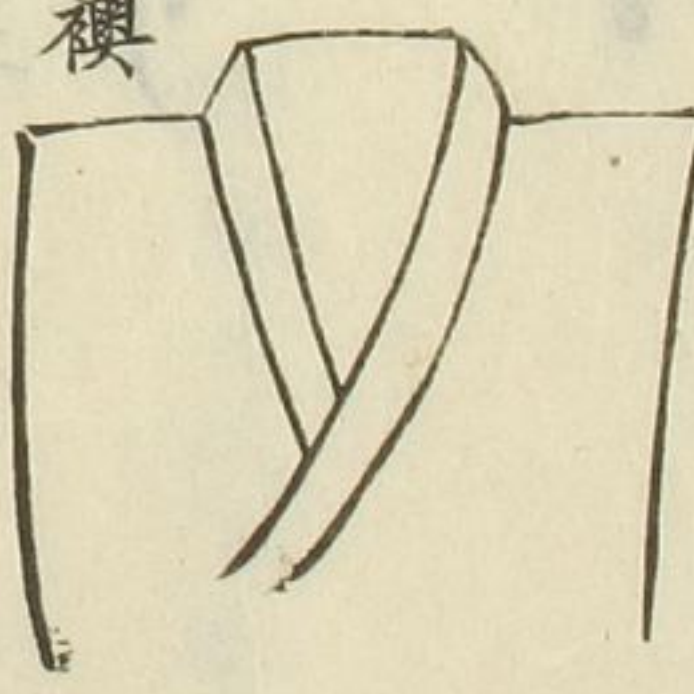
光大日盤領ト盤
 ノ字メダルトヨム領マ
 ロタメダルトヨム領マ
 ミラ略語クビカミナリ
 方領トハエリツケマ
 ロカラス方ナルユ也
 領メダラズメ着タ
 レルユハタレクビヲ轉
 語ニテタリクセト云
 ナルベシ領トハエリノ
 度也

後ハ付て左の紐ハズビウとの折伏ヨロサキヲ付て左の袂ヨリ
 出でて前ヨモダラシテゆべし馬ノ家ノ時ハ衣の紐をも後
 よりある同様ヨゆべし云々貞丈云タリクビハ紐アリト云ハク
 タリクビナラバ云々ノ文ニテハタリクビノ時ヒモノ付ヤウ替ルマウ
 ニ聞ユレト本文ノ心ハクビカミノヒモヲ其終付直サズシテタリ
 クビニシテキルトキノヒモノ結ヤウノ違ヲ云ナリ本文ノ書ヤウワロキナリ
 尤ハ繪圖を著セ

○盤領
 名カミ
 バシレウ
 狩衣水干
 等如此



○方領
 タリクビ
 直垂素襖
 等如此



水干ハハノ領ハ折伏ヨロサキヲ付て左の袂ヨリ
 出でて前ヨモダラシテゆべし馬ノ家ノ時ハ衣の紐をも後
 よりある同様ヨゆべし云々貞丈云タリクビハ紐アリト云ハク
 タリクビナラバ云々ノ文ニテハタリクビノ時ヒモノ付ヤウ替ルマウ
 ニ聞ユレト本文ノ心ハクビカミノヒモヲ其終付直サズシテタリ
 クビニシテキルトキノヒモノ結ヤウノ違ヲ云ナリ本文ノ書ヤウワロキナリ
 尤ハ繪圖を著セ

